フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究

フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討から

児玉　衣子　著

現代図書

フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究

フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討から

児玉　衣子　著

現代図書

はじめに

本書は、近代乳幼児教育の創始者フリードリッヒ・フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852, ドイツ）が世界最初のキンダーガルテン（Kindergarten, 1840 創設、邦訳：幼稚園）の開始に伴って出版した『母の歌と愛撫の歌』（出版年記載がないが推定 1844 年出版）という遊び歌絵本を、教育方法学的な観点から取り上げて、そこに張り巡らされた乳幼児教育・保育の体系とその内容を明らかにしようとするものである。

教育方法学的観点から取り上げている内容とは、1. 教育目的、教育理念、教育目標等の内容、2. 子どもの発達を何に見出しているのか、3. 教育目的・目標という大人の側の意図をまだ理解しない時期であるからこそ必要になるところの、教育目的・目標という大人の側の条件と発達という子どもの側の条件とはどのように結びつけられるのか、4. 教育・保育の内容および方法、5. 教育・保育の内容および方法は教育目的・目標および子どもの発達とどのような係りにおいて出てきているのか、等々を探っているということである。

その際、本書のタイトルに掲げているように、筆者は、フレーベルの創出した近代乳幼児教育と、それを表現するためにわが国において創出された保育ということばとを、同義に用いている。また、人生の土台の時期のために学校教育とは異なる意図と内容とをもって創造された乳幼児教育を、その意を汲み取ってわが国において保育という新語を当てて開始させた保育の、その豊かな内容を学的に探る語として、保育学という語を用いる。そのことを、以下、もう少し詳しく説明しておきたい。

明治初期、それまでわが国では見たことも聞いたこともなかったキンダーガルテンなるものを「幼稚園」と翻訳し、国立の現お茶の水女子大学附属幼稚園を 1876（明治 9）年に開設し、幼児期のための教育のあり方をわが国においても根付くように図ったとき、わが国の先駆者たちは、それまで全く知らない教育のために、「保育」「保母」ということばをも創り出した。

なぜなら、封建時代から存在した意図的な教育のあり方として「しつけ」「習い事」「稽古事」等が存在したが、それらはすべて、大人の側の有する大人に通用する知識、技能、礼儀作法等を子どもが試行錯誤しながらそれに到達するのではなく、既に確立したものを最初から子どもに教え込んで、子どもが回り道をせず無駄なく大人の有する知識、礼儀作法等の域に達するために教授・学習形態をとった。1872 年から開始された小学校教育も基本的に同じ形態をとった。その意味で、教育とは教授主体のものであるという封建時代以来の確固とした一般的認識が揺るがせられることはなかった。

これに対して、「幼稚園」教育のあり方は、子どもの発達から生じる好奇心や身体を動かしたい衝動を活かし、それに寄り添うことで子どもの成長を図るものである。その結果、大人には子どもの他愛ない「あそび」としか見えない活動が主要かつ重要になる。発想が根本的に異なる新しい教育に「幼児の教育」と名づけず「保育」というそれまで無かったことば

を作り出し、それを文部省が採用して用い続けたところには、学校教育とは発想が根本的に異なる教育のあり方を認め、根づかせる意図があったと考えられる。

また、幼稚園の後に保育所（託児所）が開設され始めると、保育所でのあり方についても「保育」、保育者は「保母」と呼ばれた。これは幼稚園、保育所を問わず乳幼児期の子どもの望ましい育ちのためのあり方とそれに関わる職業人の呼称として、これらの語が定着したことを示している。

その後、文部省の制度では幼稚園教育、幼稚園教諭と呼称が変更されたが、実践現場においては誇りをもって実践のあり方を「保育」、幼稚園教諭を「保育者」と呼び習わしてきた。

この意味で、現代日本における「保育」という語は、幼稚園、保育所等の種別を問わず、フレーベルが近代に創造したところの子どもにとって不可欠の、子どもの発達的状況を損なわずに望ましい成長へ導くあり方を示す語である。

筆者は、その思いに励まされて、フレーベルが近代教育の最後の華として理論的にも実践的にも体系的に創出した乳幼児教育と、それを表す言葉自体から新しく設けて日本に根づかせてきた歴史をもつ保育とを同義に用いる。そして、その学的検討をフレーベル近代乳幼児教育・保育学と呼ばせていただくことにする。

なぜ、教育方法学的な観点から『母の歌と愛撫の歌』という歴史的遺物のような本を検討するのか。その理由は２つある。第一には、実践を省みるには、目標から振り返るだけではなく実践の根拠である原点の意図、内容等から振り返ると、実践だけではなく目標の視座についても確実になるからである。第二は筆者の個人的体験にある。筆者は幼稚園教諭としての数年に子どもと生命が１つになる至福を経験した。その中で、自分で保育を作らなければならなくなった時、一見とりとめなく流れる生活に存在する言語化しにくい豊かさだけではなく、その中に存在する確固とした骨組みのようなものを感じないではいられず、それを知る必要を痛感した。この問題意識をもって見直した時、『母の歌と愛撫の歌』という愛らしい遊び歌絵本は、フレーベルが、人間形成という巨大な思いのもとに前人未到のわざを体系的に、しかも細心の注意を払って具体的に語っていることを明らかにしたのである。

フレーベル自身、別のところで『母の歌と愛撫の歌』について次のように語っている。「真に子どもおよび人間を発達に即して教育する意識的陶冶の出発点＝根源点を示しているだけではなく、また、この人間陶冶の手段（die Mittel）ないし過程と方法（die Wege und die Wesen）、目的と目標（der Zweck und das Ziel）を示しているだけではなく、さらにまた、実際に幼児期を育むそのような家庭生活の最も重要な瞬間々々をも例示している」[1]。筆者は

1）荘司雅子訳「『リナが読み方を覚えた』やり方に示されている発達に即して教育する人間陶冶の精神」小原國芳、荘司雅子監修『フレーベル全集』第４巻、玉川大学出版部、1981、670 頁。
Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schrichten, Hrsg. v. Dr. Wichard Lange, Abt.2: Pädagogik des Kindergartens, T.C. Enslin, 1874, 2 Auflage,S. 350.

実践における今日的関心からこの書に行き着いたが、その内実を、フレーベル自身が既にこの本の中に意図的に組み込んでいるという。だから、筆者の目的および作業の内容は、フレーベルがこの書に組み込んだというそれらを探り出すことであるといい直すこともできる。

先行研究について、『母の歌と愛撫の歌』を研究対象にした最新の研究として、Konrad, Cristiane による Die“Mutter- und Koselieder”von Friedrich Wilhelm August Fröbel Untersuchungen zur Entstehungs-und Wirkungsgeschichte, 2006. がある。これはドイツ、Würzburg 大学学位論文であり、題目通り、成立と影響等につき精細な検討がなされている。しかし、乳幼児教育の内容への言及は教育方法学的観点による検討を加えたものではない。**『母の歌と愛撫の歌』**の成立事情の研究については、これ以前に日本においても岩崎次男、石橋哲成等による検討があるが、いずれも内容については彼の教育思想の裏づけにふれる程度である。

フレーベルにおける学習段階論という点で教育方法学の範疇に入る１つのアプローチとして Birr-Chaarana, Edith による Auf dem Wege zur pädagogischen Mitte: Stufentheorie bei Rosseau, Schleiermacher und Fröbel,1992. がある。ドイツ、Bochum 大学学位論文である。しかし、これも学齢期が主対象であり、『母の歌と愛撫の歌』の体系的保育内容・方法に迫るものではない。

フレーベル教育思想の一環として『母の歌と愛撫の歌』にふれた研究者は多く、代表的な例としてE. シュプランガー、O. ボルノー、荘司雅子等が挙げられる。しかし、実践のために『母の歌と愛撫の歌』の内容にふれた論は少なく、米国の S. Blow による Symbolic Education, A Commentary on Froebel’s “Mother Play”., International Education Series XXVI, D. Appleton & Co., 1906. また日本では、同じく米国人で神戸、頌栄幼稚園および頌栄保母伝習所の創設者でジャパン・キンダーガルテン・ユニオン（JKU）結成をも導いた A.L. ハウによる本邦初訳の『母の遊戯及育児歌』（1897）における各歌の簡単な解説および JKU 第５回研修会講演等が代表的なものである。しかし、いずれも実践のための論であるが筆者が検討するような教育方法学的範疇のことがらについてはふれず、むしろ解説は各遊戯の精神的意義へ向かう。これは、何よりも保育に対する当時の時代の要求が、現在のそれまで至っていなかったことを示している。

現在、日本では保育が普及し、保育についてもより詳しい教育方法学的検討を要求される時代に入っている。その結果、フレーベルが無から有を創り出した際に払ったさまざまな実践的配慮についても学的検討を加えて明らかにする必要が生じたということなのである。そのため、本研究は、『母の歌と愛撫の歌』を取り上げる視点の設定およびその視点による検討結果と、両方ともに世界初出になる。

本書は研究書であるが、前半部分に『母の歌と愛撫の歌』のわが国最初の本格的翻訳であ

る茅野蕭々訳の同書（岩波書店刊、1934）を入れている。これは、本書後半の研究部分のみを読んでも内容を理解し難いからであり、また、見る機会の少ない同書にふれてほしいという願いがあるからでもある。

茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』の取り入れに際して若干のお断りをしておきたい。

まず、なぜ古い翻訳書を用いるのかというと、茅野蕭々はドイツ文学者としても詩人としても令名の高かった人である。『母の歌と愛撫の歌』では詩の部分が茅野の翻訳であるが、原文に忠実でありつつ日本語の詩としても薫り高い名訳である。また、その他の部分は門下生の翻訳であるが、晦渋といわれるフレーベルの原文に忠実な結果、日本語としては読みにくくもあるが同時に原文の雰囲気を伝えているともいいうる。

現代日本語としては荘司雅子による優れた翻訳が玉川大学出版部から1981年に出版されており、現在、私たちはその恩恵を受けている。しかし、筆者としては昭和のもう1つの名訳が消え失せるのを惜しむ気持が強く、漢字や仮名づかい等を現在のものに改めてここに用いさせていただいた。また、原著の旧アルファベットを読めないという声を耳にしたので、詩の部分を現代アルファベットに直して付録にした。筆者自身、この詩によって旧アルファベットを学んだからである。原著の、絵も文字も視覚的に美しく、それで遊んで絵本としても楽しんだ『母の歌と愛撫の歌』の魅力を知っていただきたいと願っている。

最後に、25年間、筆者にとってこの研究は独りトンネルを手探りで掘り続けるような心地の作業であった。足りないところも多々あろうかと思う。どうか、幼子の様子や幼子の心を汲み取った立場からのご助言、ご示唆をお願い申し上げる。

2009年9月1日

児玉 衣子

目　次

はじめに……i

第Ⅰ部　フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の紹介

第Ⅰ部の序……3
第１章　『母の歌と愛撫の歌』の成立……4
第１節　『母の歌と愛撫の歌』の成立とその特徴……4
第２節　『母の歌と愛撫の歌』の構成と曲について……5
第３節　日本における翻訳史……6
第４節　本研究に用いる底本について……7
第１項　原文について……8
第２項　本研究に用いる翻訳について……9

第２章　フリードリッヒ・フレーベル著茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』
（岩波書店、1934 年刊）の再録……11
再録にあたり、お断り……11
1. 漢字、仮名づかい、数字の表記の変更について……11
2. 「欄外装飾画の説明」の位置の変更……11
3. 目次における歌番号のつけ方について……11
4. 強調語の表記について……11
5. 「欄外装飾画の説明」に、「筆者による補足」のつけ加え……12
6. 歌詞の現代アルファベット版のつけ加え……12

F. フレーベル著茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』
Mutter- und Koselieder　母の歌と愛撫の歌……27
Spiel-Lieder　遊戯の歌……37
Schluss-Lied　終 の 歌……281
説明……287
付録　歌詞の現代アルファベット版……325

第Ⅱ部　F. フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究
―『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討から―

第Ⅱ部の序……405
1. フレーベル自身による本書構成についての言及……405
2. 本研究のねらい……405

第１章　フレーベルによる近代乳幼児教育の構造
―「『母の歌と愛撫の歌』への指示」における教育課程構築の検討から―……407
第１節　子どもの本質、および、子どもの成長理解……407

第２節　人間陶冶の目的(教育目的) ……408
第３節　教育目的と子どもの発達との関係は対等・対置 ……409
第４節　教育理念としての子どもの成長の三側面 ……409
第５節　教育目的の教育目標化 ……410
第６節　フレーベルによる近代乳幼児教育の構造 ……412

第２章　『母の歌と愛撫の歌』における区分、段階等とそれぞれの教育目標 ……415
第１節　『母の歌と愛撫の歌』における区分、段落等の存在(図１) ……415
第２節　「母の歌と愛撫の歌」(７編)における区別と教育目標 ……415
第１項　「母の歌」と「愛撫の歌」との区別 ……415
第２項　愛撫する身体部分に見られる特徴 ……417
第３項　中心という位置のもつ意味 ……418
第４項　「母の歌と愛撫の歌」(７編)の教育目標 ……420
第３節　「遊戯の歌」における段階、区分とそれぞれの教育目標 ……420
第１項　「遊戯の歌」50編の中の段階と区分 ……420
第２項　「遊戯の歌」の段階、区分毎の教育目標 ……421
第４節　「終の歌」における教育目標 ……423
第１項　「終の歌」の構成 ……423
第２項　「終の歌」の教育目標 ……423
第５節　『母の歌と愛撫の歌』全体の教育目的・目標の構成(図２) ……424

第３章　『母の歌と愛撫の歌』における人間陶冶の過程と方法 ……427
第１節　子どもの成長の三側面への注目 ……427
第２節　『母の歌と愛撫の歌』全体を通じて成長する子どもの年齢 ……428

第４章　三側面の内、子どもの「身体運動・動作」の側面の検討 ……431
第１節　身体運動・動作から見た「遊戯の歌」の構成
——三区分の存在とその図式(図３)—— ……431
第２節　遊びに用いる身体部分と動作の概要(図４) ……433
第３節　身体運動・動作の構成に見られる特徴 ……438
第１項　各区分内の連続性
——三区分は３段階、各段階とも中休み後に動作の高度化—— ……438
第２項　身体運動・動作の連続性と系統性の図式
——「遊戯の歌」全体で３段階・６層の螺旋構造—— ……442
第３項　動作のない歌の占める中心的位置 ……445

第５章　三側面の内、子どもの自己感情の表れとしての
「他者への人格的関係」の側面の検討 ……447
第１節　「他者への人格的関係」と『人間の教育』(1826)における「共同感情」との共通性 ……447
第１項　『人間の教育』(1826)における「共同感情」の内容 ……447
第２項　「共同感情」と「他者への人格的関係」との共通点 ……448
第２節　子どもの「他者への人格的関係」の発展
——子どもが意識化する「他者」の11段階—— ……448
第３節　『母の歌と愛撫の歌』における子どもの「他者への人格的関係」の発展過程(図５) ……460
第４節　子どもの自己感情の表れとしての「他者への人格的関係」の発展に見られる特徴 ……460

第６章　三側面の内、子どもの「薄明るくなりゆく精神の認めること」の
発展過程における系統性 465
第１節　「遊戯の歌」の三段階および第二段階における三区分に関する断り 465
第２節　「母の歌と愛撫の歌」(7編)における子どもの発達的状況とそれへの配慮 466
1. 主人公の子どもの発達的状況 466
2. 母親の内に持っておくべき精神的内容 467
3. その他、教育方法的に注目すべきことがら 468
第３節　「遊戯の歌」第一段階(1)「足をばたばた」－(10)「小魚」における子どもの
発達的状況と配慮 469
第４節　第二段階第一区分(11)「縦に横に」－(23)「塔の上の子ども」における子どもの
発達的状況と配慮 494
第５節　第二段階第二区分(24)「小児と月」－(32)「窓」における子どもの
発達的状況と配慮 521
第６節　第二段階第三区分(33)「炭焼き小屋」－(41)「建具屋」における子どもの
発達的状況と配慮 533
第７節　第三段階(42)「馬乗りと善い子」－(50)「小さい画家」における子どもの
発達的状況と配慮 549
第８節　子どもの「薄明るくなりゆく精神」の側面から見た〝母の歌と愛撫の歌〟構成の特徴 567
第１項　子どもの興味対象の移り変わりに合わせた構成 567
第２項　各段階および各区分における中心的な歌の存在(図6) 567
第９節　子どもの「薄明るくなりゆく精神の認めること」の発展に見られる特徴 568

第７章　フレーベル近代乳幼児教育・保育の教育方法学的特徴 577
第１節　乳幼児教育・保育課程の構築 577
第２節　フレーベル近代乳幼児教育・保育の構造 578
第３節　教育目的と対等・対置にある乳幼児の発達 579
第４節　教育方法としての「生命の合一」 579
第５節　乳幼児教育・保育の内容に関わって 580
第６節　神の火花としての人間の教育・保育 582
第７節　現代乳幼児教育・保育におけるフレーベル近代乳幼児教育の影響 582

あとがき 585

第Ⅰ部

フリードリッヒ・フレーベル著
『母の歌と愛撫の歌』の紹介

第Ⅰ部の序

教育の観点からすれば、近代とは、①誰もが教育を受けられる、②教育の目的と理念は、誰もが1人の人間として知・徳・体の全面においてバランスのとれた人間になることを目指し、その実現はどの年令においてもその発達に従って成長することをもって図る、③教育内容としてさまざまな教科目が設けられ、それらの教科目の教授・学習の内に子どもを目標達成へ導く、という近代学校教育の思想が成立し、発展し、ついにスイスのペスタロッチによってその実現を見た時代である。同時に、それらが思想として発展し、国民学校に結実するにいたる土台でありつづけたのはまぎれもなく宗教、具体的にはキリスト教信仰であった。

若い日に研修教師としてペスタロッチの下に学んだ若いフリードリッヒ・フレーベルは、その後、不思議な運命の糸に導かれるようにして結晶学研究者の道を断念して数十年にわたって学校教育を実践した後、彼もまたペスタロッチと同様に、50歳代半ばにして全く新しい教育を創造した。乳幼児教育である。1840年、彼は学校教育とは異なる幼児教育のあり方を、キンダーガルテン（邦訳、幼稚園）という具体的な施設および保育者養成所によって、近代教育の最後の華として創り出した。

実際には、彼は、1836年頃から幼児教育を構想し、翌年にはガーベ（邦訳：恩物）制作を行い、幼稚園という名称はまだ考えつかなかったので「遊びと作業の施設」と名づけた施設で幼児教育を創り出していた。そして、その教育を「幼稚園」という名称の下に組織立てて開始し、さらに子どもの誕生から生後6、7歳に至るまで1冊に体系立てて著したのが『母の歌と愛撫の歌』（推定1844年発刊）である。新しい乳幼児教育のあり方を彼はさまざまに発表しているが、1冊の本として著したのは同書のみである。そこで、まず第Ⅰ部で、この本の成立とその内容を見るところから始めたい。

第1章　『母の歌と愛撫の歌』の成立

第1節　『母の歌と愛撫の歌』の成立とその特徴

フレーベルは、幼児期の子どもたちのために全く新しい教育のあり方と具体的施設としてのキンダーガルテンを創り出すにあたり、遊具、遊戯等をも創り出した。遊具としては1837年頃から1838年頃にかけて創られたガーベ（Gabe, 邦訳、恩物。原意は神からの贈物。複数 Gaben）と名づけられた6色の毛糸ボール、積木、豆、棒、金輪等の20種類にわたる体系的な遊具が有名である。また、多くの戸外遊戯と、1844年頃には『母の歌と愛撫の歌』と名づけた遊び歌絵本を創り出した。1844年頃といったのはこの本自体には出版年が記載されておらず、手紙類等からそのように推測されているからである。

『母の歌と愛撫の歌』は、子どもが誕生した時から少年・少女期に至るまで、その成長に従って親子で遊んだり絵を見て会話をかわしたりする内に子どもを身体的にも情緒的にも知的にも育てていく様子を、絵と歌と説明とによって描いたものである。すなわち、フレーベルは『母の歌と愛撫の歌』という1冊の本によって、人間の誕生から幼児期を経て学齢期に入った位までの時期を視野に入れた教育のあり方を体系的に示しているのである。しかも、この本は、前人未到の近代乳幼児教育の内容を体系的に語るところの唯一の単行本であるにもかかわらず、外見的には何気ない、むしろ他愛ないとさえいいうる家庭の乳幼児向けの遊び歌絵本である。

この本の前半部分には子ども向けの絵（欄外装飾画）と題詞と歌詞が置かれ、後半には親向けに「表紙の説明」「扉の説明」「子どもに見入る母への一瞥」「欄外装飾画の説明」等、絵を解説しつつフレーベルの教育理解を明らかにする諸説明が置かれている。それらにおいてフレーベルは、彼が子どもの本質をどのように理解しているのか、そこから生じる教育の目的、乳幼児の発達という自立性、発達に従って身体的・情緒的・知的全面において成長するための教育的配慮の内容と方法等を、母親に向かって親しく「お母さん！」（Mutter, Du）と呼びかけながら、さりげない口調で語っている。まさに育児書である。つまり、フレーベルはこの本を、自らの創り出した教育の大きさを誇らしく大上段に語る書物としてではなく、あくまでも親子による遊びを楽しみ会話を楽しむ内に親も子も育つための美的な実用書として、世間一般の家庭の親に分かってもらえるはずだと信じて、差し出しているのである。

第Ⅱ部に述べることになるが、前例の無い教育を創り出すにあたって、フレーベルは緻密な注意を払って子どもの発達を見て取り、それに対する多方面な配慮を教育内容にするにあたって複雑ないくつもの構造を創り出している。そしてさらに、それらを何気なく1つに溶け合わせて人間形成の土台の時期の教育・保育のあり方にしている。そこには、フレーベルがかつて結晶学の最先端理論の一翼を担った研究者であり自然科学に造詣深かったという背

景だけではなく、彼のキリスト教信仰がこの新しい教育の根本をも規定していることが明らかに窺われる。すなわち、彼はキリスト教信仰にもとづき人間を、神から神性を与えられた存在と確信した。だからこそ、万物共通に与えられた神性の人間における1つの表れとして発達の法則性を受けとめ、それゆえに発達に従った人間の成長のあり方を誕生の時点から新しく創り出したのである。

その意味で、『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルの科学的精神と思想と信仰と教育者としての経験と識見との集大成であり、それら全てを注ぎ込んで全く新しい乳幼児教育を構築して示した書であるということができる。すなわち、記述内容だけではなく、フレーベルが組み立てた本書の乳幼児教育の構造自体に、彼が人間の成長に抱いた大きな願いと信頼も表されていると見ることができる。

第2節 『母の歌と愛撫の歌』の構成と曲について

『母の歌と愛撫の歌』は、前表紙、後表紙とも美しい線描の版画[1]である。また内容は、前半には58編の歌とそれらの歌に添えられた52枚の版画の絵が置かれており、後半には、この書の土台になるフレーベルの子ども理解、教育目的、子どもの発達の捉え方と教育との関わらせ方等を述べている「『母の歌と愛撫の歌』への指示」、扉絵の説明を行っている「扉の説明」、52枚の絵の説明によって乳幼児期の教育・保育の内容と方法を語っている「子どもに見入る母への一瞥」および「欄外装飾画の説明」等、家庭の親向けの説明文から成り立っている。

前半の58編の内訳は「母の歌と愛撫の歌」7編、「遊戯の歌」50編、「終の歌」1編である。誕生したばかり赤ん坊を見つめる母親の歌から開始される7編の「母の歌と愛撫の歌」は、母親の感慨を歌う3編の「母の歌」とスキンシップによって赤ん坊の成長を図る4編の「愛撫の歌」から成る。この7編を辿る間に、誕生したばかりの赤ん坊は生後6ヵ月位までに成長していることが歌詞から窺われる。次の、「遊戯の歌」50編は、その始めから終わりまでの間に生後6ヵ月位の赤ん坊から6、7歳位までに至る子どもの成長が描かれる。とりわけ3歳頃以降の子どもから遊戯だけではなく絵本としての活用が意図されている。「遊戯

1) 絵が銅版画であるか石版画であるかについては、一見したところ区別がつかない。しかし、本書に入っている『母の歌と愛撫の歌』の底本は初版ではなくJ.プリューファーによる翻刻版であるが、プリューファーは復刻の後に彼が付した「この著作が生まれた精神」においてフレーベルの1836年の著述の引用という形で、フレーベルが石版印刷術と書籍印刷術とを頼りにしていたことを明らかにしている。この引用の原文を筆者は明らかにすることができずにいる。しかし、少なくとも南ドイツ地方において当時までに精緻な線描の石版画の娯楽本が流布していたことなどから推測すると、銅版画よりも石版画の方が一般的に用いられていたのだろうと思われる。しかし、同時に上掲の「この著作が生まれた精神」においてプリューファー自身はこれらの絵を銅版画と述べており、素人目には全く区別がつかない。
美術専門家による初版本の絵およびインク擦れを保護するために付けられた薄紙等からの解明を待ちたい。

の歌」50編は、どの歌も絵と題詞（大人向け）と歌詞（子ども向け）とから成り立っており、子どもが、これら1つひとつの歌ごとに親子で遊戯をしたり絵を見ながら会話を交わしたりする内に親しみを抱く世界を広げていくように、意図されている。最後の「終の歌」1編は、全体の総まとめというべき内容である。

絵はすべて美しい版画で、フレーベルの教え子であるフリードリッヒ・ウンゲルが制作した。その際、フレーベルによる詳細な指図のあったことが本文から窺われる。

それに対して、曲については、初版時から別冊で曲集がついていたことは目次から明らかなのであるが、フレーベル自身はこの書の中で、曲に関しては、絵への熱心な言及からすれば不思議なほど何も述べていない。しかし、『母の歌と愛撫の歌』の翻刻版であるプリューファー版（復刻した本の後方の部分にJ.プリューファーが新しく解説を付け加えて1冊にした版。Ernst Wiegandt社、ライプチッヒ、1911年刊）によると、歌はごく普通の親や子ども自身が歌うための歌でなければならなかったところから、フレーベルは作曲を、当時、カイルハウ学園（フレーベルの創った学園）の音楽教師をしていたローベルト・コールに依頼して、でき上がったものであるという。

ただし、曲については、フレーベルの生前から既に、保育者養成所の教え子が各地でキンダーガルテンを始めると、すぐに子どもや土地に合わせて変えたりしたことが報告されている[2)]。さらには、各国にキンダーガルテンが普及するにつれて、その国々における作曲に取り替えられたりしており[3)]、コールの最初の作品がどの程度普及したのかということについて、詳しいことは不明である。

第3節　日本における翻訳史

わが国に『母の歌と愛撫の歌』がもたらされたのは、記録されているものとしては1876（明治9）年11月に発足した東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園において、松野クララによって指導された「家鳩」（鳩の家）の遊びが最初である。つまり、本がもたらされたのではなく、本の中の遊戯が松野クララによって紹介され、遊ばれて楽しまれた[4)]。

この本のわが国最初の翻訳書は、1897（明治30）年、神戸の頌栄幼稚園園長A. L. ハウ（Miss Anny Lion Howe）によってもたらされた。これは 詩の部分については、当時、歌人として

2) H.ケーニッヒ編岩崎次男他16名訳『フレーベル賛歌――子どもと人間の友あての女性たちの書簡――』フレーベル館、1991、147頁。

3) A. L. Howeによる Japan Kindergarten Union 第5回研修会（於軽井沢、1911）講演記録によれば米国ではJ. Jarvisによる初訳（1878）の全曲取り替え、S. Blowの翻訳（1895）においても新曲がつけられたという。Anny Lion Howe, FROEBEL'S MOTHER PLAY, Fifth Annual Report of Kindergrten Union of Japan, 1911,（社）キリスト教保育連盟刊、1985復刻、50頁。また日本においても、お茶の水幼稚園の最初の唱歌は曲を宮内庁式部寮の伶人、文部省音楽調所メーソン等に委嘱したという。文部省『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版、1969、88頁－89頁。豊田英雄子「幼児教育の今昔」『幼児の教育』29巻1号15頁－16頁（1929.1.）、幼児の教育復刻刊行会、1980.

4) 宮田修「幼稚園時代の追憶」『婦人と子ども』1月号、フレーベル会、1918、1、13頁－16頁参照。

名を成していた大和田建樹他2名が、子ども向けというよりもおとなが和歌のように口ずさむにふさわしい流麗な詩歌にしている。絵については浜玉園 他1名に依頼して、原画を当時の日本人になじみ深い日本の伝統的な丸髷の婦人、稚児髪の幼児等の風俗に合わせて描き直したもので大変な労作である。「説明」はごく短く大意を要約した文言になっている。このまことに日本化された労作である翻訳本は、頌栄保母養成所においてテキスト本として用いられた。

しかし、現在の私たちは、もはや訳詩の水茎の跡麗しい文字さえ読むことができず、絵についても和服に丸髷の母親と和服に稚児髪の子どもの姿に違和感を覚えてしまう。そして、違和感を覚えること自体に、この100年ほどの間にわが国に生じた急激な変化を改めて感じることにもなる。

原著に忠実な、その意味でわが国最初の本格的な翻訳は、1934（昭和9）年、茅野蕭々（ちのしょうしょう）およびその門下生によってなされて岩波書店から出版された『母の歌と愛撫の歌』である。茅野への翻訳依頼は、現キリスト教保育連盟の前身であるジャパン・キンダーガルテン・ユニオン（通称JKU）からなされた。

「はじめに」で既にふれたが、この翻訳書の詩の部分は、当時、第一級のドイツ文学者であり詩人でもあった茅野蕭々による名訳である。他のさまざまな「説明」の部分は弟子たちによって翻訳された。さらに、絵については、当時、この本の貴重な初版本をドイツのフレーベル博物館で入手し所蔵していた倉橋惣三から借り受けて、岩波書店が技術の粋を駆使して復刻したという。確かにこの翻訳書の絵は、紙質の良さもあり、ドイツで翻刻出版されて茅野訳の底本にもなっているプリューファー版（1911）よりもよほど美しい。

現在の私たちにとって入手可能な『母の歌と愛撫の歌』は、荘司雅子の翻訳になるものである。1976（昭和51）年、㈳キリスト教保育連盟が翻訳を依頼し出版したものと、それに手を入れて『フレーベル全集』第5巻（玉川大学出版部刊、1981年）に収めたものとの2種類がある。荘司訳は漢字や仮名づかいが現代のものであるばかりではなく女性らしいふくよかな美しい文章であり、また、フレーベルの長い原文が日本語としてわかりやすいように短く区切って文章化される等の工夫がされており、読みやすい。

以上のように、この本は、日本においても不思議な生命力をもって、数十年の間隔をおいてその時々の第一級の翻訳者を得て、都度、新しい生命を吹き込まれてきた。

第4節　本研究に用いる底本について

本研究の底本は、原文については京都大学教育学部図書室所蔵の初版本を用いた。

また、翻訳については茅野蕭々訳（岩波書店、1934年刊）を用いている。それぞれに断っておきたい事情があるので、それを述べておきたい。

第1項　原文について

既述したが、初版本には出版年が記載されなかった。そのため、出版前後の状況にふれた手紙類から推して、現在では1844年とされている。

京都大学教育学部図書室所蔵の“Mutter- und Koselieder”については、以下のような諸特徴から筆者は初版本であるとした。

1)　この本は筆者の知るかぎり次のような経緯を経て保管されている。1930（昭和5）年2月18日付けで京都帝国大学図書に登録。文学部購入。ただし購入者や購入講座名は筆者が教育学部で閲覧した1980年代当時には既に不明。戦後、文学部から教育学講座が独立して新しく教育学部が創設されたとき、文学部から移管された図書の中にこの本が入っており、教育学部図書室において貴重書として保管されてきた。

この本の表紙の内側にはドイツの古書店のシールが貼り付けられている。購入時からこの本の表紙の背の部分はとれてしまっており表紙は前後とも黒無地。しかし、本文には表紙の2枚の絵への言及があるので、黒無地の前後の表紙2枚は最初からのものではなく、後に代替の仮表紙としてとじつけられたことが明らかである。古書店のシールは黒無地表紙に貼り付けられていたところから、黒無地表紙の古書が京都帝国大学によって購入されたと考えられる。

2)　本体の版画は全部オリジナルのものであり、圧刷の痕跡さえとどめているものがある。また、各絵にはインクを落ち着かせて絵を保護するために薄紙が貼られている。

絵の枠組みの上下中央には、それぞれに小さな十字印とそこを針で突いたような穴が残っている。これは必然性をもってこの十字印および穴がつけられたことを示しており、それは次のように考えられる。すなわち、絵の中の所定の位置に、後から文字を挿入印刷するために用いられた、つまり2度刷りの際の位置を決めるための痕跡と考えられる。

3)　この本は、1冊の前半には子ども向けに50枚にも及ぶ絵（題詞と詩をも含む）がまとめられ、後半には大人向けに、それらの題詞や詩や絵に関する説明がまとめられている。その際、頁の数え方は最初から終りまで、紙の表を1頁、裏を2頁と数えるところのいわゆる頁の数え方ではなく、1枚の紙を1葉（ヨウ）と数える数え方、すなわち紙の表面だけで数えて裏面はたとえ用いても数えない数え方で統一されている。つまり、前半の絵の部分は紙の片面だけ印刷、後半の文章部分は紙の表裏とも印刷というように、この本は1冊の中で前半と後半とでは紙の印刷の仕方が異なるのであるが、それにもかかわらず枚数の数え方は葉（ヨウ）で統一されている。

1冊の本の製作過程を偲ばせる数え方、紙質、印刷文字体とも一貫しているところから、おそらく手作業で絵の葉と文字部分の葉とを1枚ずつ重ねていって1冊の本にした初版本であると考えられる。

4)　この本のサイズは、米国の "The National Union Catalog Pre-1956 Imprints" 第186巻376頁 NF0402230 に記載された初版本サイズと同一である。

5)　京都大学文学部図書室にはプリューファーによる翻刻版（1911年刊）も所蔵されているので、それをも参照したが、目次の歌番号の振り方や曲の存在の表示なども翻刻版による初版と同一である（後になると歌番号が原著通りでないものが存在する）。

以上のような諸特徴から、京都大学教育学部図書室所蔵の『母の歌と愛撫の歌』を初版本と見ている。

ただし、京都大学教育学部図書室所蔵のこの初版本については、さらに述べておかなければならない事情が発生した。それは、筆者の卒業後、教育学部図書室では、この本の黒い表紙を新しく取り替えて本としての体裁を整えることを行なわれた。しかし、その際、頁端の薄汚れていた部分が修理業者によって切り揃えられてしまったため、本のサイズが変わってしまった。ますます初版時の形から遠ざかったわけである。

しかし、それでも現在なお、絵も文字もオリジナルならではの美しさを保っている。子どもとともにこの本を見たなら、どんなに幸福な時間が流れただろうかと想像される。

第2項　本研究に用いる翻訳について

少し古い翻訳であるが、茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（岩波書店、1934年刊）を用いた。

現在のものとしては荘司雅子訳「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』第5巻、玉川大学出版部刊が存在するにもかかわらず古い茅野蕭々訳を用いることには筆者の次のような思いがある。

第一に、何よりも同書の原著に忠実な翻訳として本邦最初であり、かつ、漢字や仮名づかいの旧さを改めるなら現在でも充分に通用するからである。とりわけ詩の部分の、原文に忠実でありつつ日本語の詩としても薫り高い、しかも幼児にも口ずさめる翻訳は現在でも名訳といいうる。また、諸「説明」の部分についても、逐語訳に近い翻訳がなされており、原文と対照しながら読むのに好都合である。

第二に、フレーベルの原文は1つの文章が大変長いことで知られている。『母の歌と愛撫の歌』においても後半部に親に対するさまざまな「説明」が置かれているが、1文だけで1段落ということも珍しくない。それは1文の中に言いたいことがたくさん含まれるというだけではなく、1文の中においてさえ彼の思索が動いていると感じられる、ということを意味する。このような文章の特徴から彼の思考パターンとして感じられるのは、文の最初にまず命題的に述べて、後半になるほどそれを具体的に説明しようとする姿勢が感じられるということである。

荘司訳はフレーベルの思いの別の面が生かされた名訳である。すなわち、『母の歌と愛撫の歌』は世の家庭の親、特に母親に手渡すことを目指して出版された。荘司訳は、母親に向

かって語られていることが生きてくるところの優しく美しい、しかも語りかけるような文章に翻訳されている。その際、フレーベル特有の長い文は、日本語の文章として理解しやすいように数文に分けて原意を汲み取った翻訳がされている。これは、翻訳として当然の配慮であり日本語としても理解しやすくなった。しかし、反面、フレーベルが考え考え書いたような１文、つまり数文分を１文にしているのは数文がそれぞれの意味を独立して持ちつつ、しかも１文としてのまとまりを持っている（フレーベルの「部分と全体」の考え方に通じる)、という彼の文章のもつ含意を小さくしている場合があると感じられる。

茅野訳でも、やはり長い文は数文に分けられている。しかしその際、できる限り逐語訳に近い翻訳がされている。そのため、日本語としては読みにくいのであるが、反面、フレーベルの思いには忠実と感じられるところがある。

第三に、何よりも荘司訳は現在も新刊書が入手可能であるからである。『母の歌と愛撫の歌』は不思議な本で、日本でもこれまでに３度、その時代の最高の翻訳者を得て翻訳されてきたことを先に述べた。多分、将来にも優れた翻訳は出てくるだろう。しかし、今現在はまだ次のその時に至っていないようである。そうであるなら、これまでに出版された優れた翻訳が消え失せないようにするのも、今現在という時の１つの役目であろう。そのように考えて、筆者としては忘れ去られて消えることに名残惜しさ以上のものを覚える茅野訳をここに用いることにした。

ただし、1934年刊行のこの本の、発刊に関わった全ての人々の思いが凝縮したような品格の高い美しさを伝えるには届かない。残念だが、それについても、将来、改めて翻訳出版される時まで待ちたい。ここでは、せめて内容を伝えることに意を注ぎたい。

第2章　フリードリッヒ・フレーベル著茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（岩波書店、1934年刊）の再録

同書の再録を快く承諾いただいた岩波書店に感謝する。

再録にあたり、お断り

1. 漢字、仮名づかい、数字の表記の変更について

1934年当時の漢字および仮名づかいでは読みにくいため、漢字については基本的に当用漢字に変更し、常用漢字の現在もよく用いられるものは残し、適宜、振り仮名をつけた。仮名づかいについては現代仮名づかいに変更した。数字については、現在でも漢数字を慣用的に用いる場合を除き、基本的に算用数字に変えた。

ただし、詩については視覚的効果に変化が生じるため、原則として仮名づかいについては現代仮名づかいに変更したが、漢字については現在読めないものは別にして元訳のままにした。

2.「欄外装飾画の説明」の位置の変更

元訳では、原著に合わせて「欄外装飾画の説明」（翻訳では「絵の説明」）は本の後半部分に置かれている。しかし、絵および歌詞と対照しながらこれらの説明を読むためには各歌の直後にある方が読みやすいという筆者の判断により、「欄外装飾画の説明」については50編の「遊戯の歌」の各歌の直後にそれぞれの歌の「欄外装飾画の説明」を移動させた。

なお、「欄外装飾画の説明」の元々の位置は、諸説明が一括して置かれている中の「子どもに見入る母への一瞥」と「表紙の二図の説明」との間にあった。

3. 目次における歌番号のつけ方について

目次における歌の番号について、元訳は原著と異なり「母の歌と愛撫の歌」7編および「遊戯の歌」50編を1-57の通し番号につけかえている。原著は「母の歌と愛撫の歌」7編に1-7、「遊戯の歌」50編に1-50、「終の歌」1編には番号なし、とそれぞれを独立させた番号のつけ方をしている。これは、第Ⅱ部において述べることになるが、意味ある番号のつけ方と考えられるので、原著の番号に戻した。

また、原著にも元訳にも各歌の頁に歌の番号はつけられていないが、本書においては各歌の頁に歌番号をふった。これは特に第Ⅱ部において必要性が大きいからである。

4. 強調語の表記について

原著には3種類の強調語が存在する。元訳ではすべて下線が施されていた。しかし、原著

にならい、本書では以下のように表記した。

原著で最も強い強調はアルファベットを太くし（太字）、同時に、アルファベットの間隔があけられている（隔字）。これは本書29頁の歌の「信仰」「愛」「希望」の3語のみである。2番目の強調はアルファベットが太くされている（太字強調）ので、本書においてもゴシック体の太字にした。3番目の強調はアルファベットの間隔があけられている（隔字強調）。本書では下線をひいた。

なお、本書の各歌の冒頭1文字が大きく太くされている。これは、原著の同アルファベットが大きい花文字にされているのを元訳では大きい太字にしたのに合わせたものであって、その単語の意味を強調するのではない。

5.「欄外装飾画の説明」に、「筆者による補足」のつけ加え

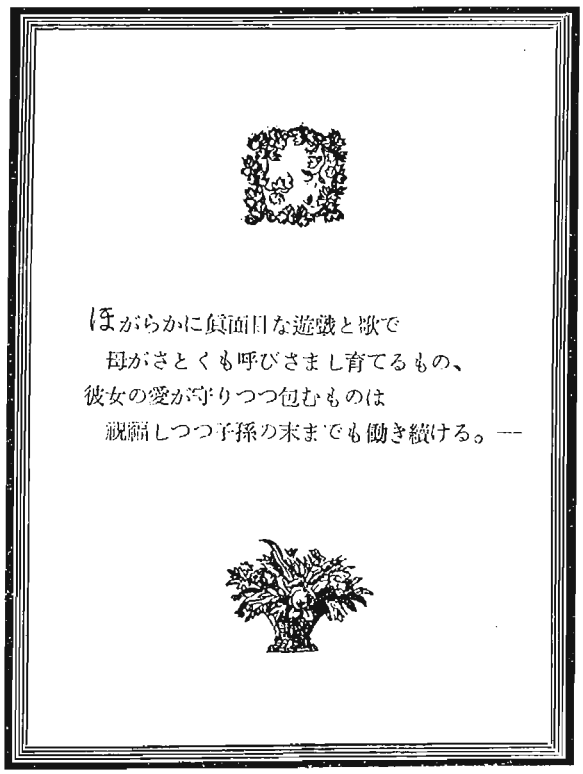
「欄外装飾画の説明」はフレーベルによる歌毎の意味の説明である。その際、彼は、大きな背景をもつ言葉や、彼の思想の集大成になる言葉などを世間の母親に向けて実にさらりと語り過ごしていくので、気づかずに読み過ごしたり、一読しても意味の分からないことがある。そこで、筆者の気づく範囲、理解する範囲で補足を入れた。読む一助になれば幸いである。

6. 歌詞の現代アルファベット版のつけ加え

歌詞については現代アルファベット化したものを付録として入れた。筆者自身、この歌詞の単語を1文字ずつ判読して旧いアルファベットを読むことができるようになった。今回、歌詞の現代アルファベット化したものを付け加えたのは、旧文字といえども慣れさえすれば現代のアルファベットと同じように読み進められるので、原文を読んでいただくきっかけになってほしいと願ってのことである。

ただし、原文には現在では用いられない綴り、小文字表記のところを大文字表記等、現代ドイツ語表現からすれば誤りと見まがう表記も多々存在する。しかし、それらについてもここでは原文通りにした。この煩瑣な作業を行った目的は、旧アルファベットに読者の眼が慣れてほしいところにあったからである。

MUTTERSPIEL



ほがらかに真面目な遊戯と歌で
　母がさとくも呼びさまし育てるもの、
彼女の愛が守りつつ包むものは
　祝福しつつ子孫の末までも働き續ける。——

フレヨエベル

母の歌と愛撫の歌

プリュウフェル編及跋
茅野蕭々譯

岩波書店

1934

“來れ、我等の小兒等を生かしめよう”

母の歌と愛撫の歌

小兒生活の高貴な養育のための

詩　と　畫

フリイドリッヒ・フレョエベル著

家　庭　書

“子供らしい遊戯にも屢々高い意味がある”

素畫、説明文及び歌ひ方を附す

„Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!"

Mutter- und Kose-Lieder.

Dichtung und Bilder

zur

EDLEN

Pflege des Kindheitlebens.

Ein Familienbuch

von

Friedrich Fröbel.

„Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel."

Mit Randzeichnungen, erklärendem Texte und Singweisen.

Blankenburg bei Rudolstadt,
die Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit und Jugend.

母の遊戯
と
愛撫の歌

人物達の上の文字：Kommt, laßt uns unsern Kindern leben.

フリードリッヒ・フレーベル著茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』

内容目次

星印（＊）のある歌はロオベルト・コオルの歌曲がある

母の歌と愛撫の歌

1. 初生児を見つつ母の感ずること……28
2. ＊子と生命の一致を感ずる母……29
3. 我が子を見て至幸なる母……30
4. 子と遊戯する母……31
5. 生い育ちゆく子を眺むる母……33
6. 子が母の膝の上に立ち又はその腕に休む時の母と子……35
7. 母の胸による子……36

遊戯の歌

1. ＊足をばたばた……38
2. ＊ばったりこ、坊やがころぶ……44
3. ＊塔の上の鶏……49
4. ＊おしまい……54
5. ＊味の歌……59
6. ＊キッチン、カッチン……66
7. ＊草刈り……73
8. ＊雛をよぶ……79
9. ＊鳩をよぶ……83
10. ＊小　魚……87
11. ＊縦に横に……92
12. ＊お菓子をぴちゃり……97
13. ＊鳥の巣……103
14. ＊花かご……109
15. ＊鳩の家……114
16. ＊拇指、すもも……122
17. ＊拇指、かがめ……126
18. ＊なつかしい、お祖母さんと
19. お母さん……129
20. ＊拇指で一つ……134
21. ＊指のピアノ……137
22. ＊無邪気な姉妹……146
23. 塔の上の子ども……151
24. 小児と月……157
25. 小童と月……161
26. 二歳に達しない女児と星……166
27. ＊壁にうつる光の小鳥……171
28. ＊小　兎……178
29. ＊狼と猪　Ⅰ 狼……182
30. Ⅱ 猪……184

31. ＊小　窓……189
32. ＊窓……191
33. ＊炭焼き小舎……196
34. ＊大　工……201
35. ＊小　橋……206
36. ＊庭の門……210
37.　花畑の門……212
38. ＊小さい園丁……217
39. ＊においの歌……222
40. ＊車　屋……227
41. ＊建具屋……232
42. ＊馬乗りと善い子……236
43. ＊馬乗りと不機嫌な子ども……242
44. ＊坊やお隠れ……246
45. ＊子どものいないいない……250
46. ＊かっこ、かっこ……255
47.　商人と少女……259
48.　商人と少年……263
49. ＊窓をもつ教会の扉……269
50.　小さい画家……275

終の歌

終結……282

前表紙の裏の詞……14
扉の説明（17頁の扉絵の説明）……289
『母の歌と愛撫の歌』への指示……291
子どもに見入る母への一瞥（29頁の図の説明）……295
（「遊戯の歌の欄外装飾画の説明」原著および元訳の位置）……各歌の後
表紙の二図の説明……303
後表紙の裏の詞……322

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

この著作が生れ出た精神　ドクトル　ヨハンネス・プリュウヘルの跋……307
訳者の言葉……319
跋……321

筆者による補足一覧……23
歌詩の現代アルファベット版……325

筆者による補足一覧

「母の歌と愛撫の歌」

「子どもに見入る母への一瞥」　1.「母の歌」と「愛撫の歌」との区別……301
　　2. ハシバミの花体験……301

「遊戯の歌」

1「足をばたばた」　1）生命……42
　　2）後姿の女性……43
2「ばったりこ、坊やがころぶ」1）遊戯に用いる身体部分の指示……47
　　2）力……47
　　3）「発達」が重視される理由……48
3「塔の上の鶏」　初めての真似あそび……53
4「おしまい」　自由……57
5「味のうた」　趣味について……65
6「キッチン･カッチン　1）「〇〇の時間」ということ……70
　　2）子どもの予感……71
7「草刈り」　労働･仕事･職業……77
8「雛を呼ぶ」　人生に１人でいないことこそ、人生の生き生きした感じだ（題詞から）……82
9「鳩を呼ぶ」　1）子ども自身が歌う歌の始まり……85
　　2）手あそび･指あそびの意義……86
10「小魚」　まっすぐと曲がったこと……91
11「縦に横に」　1）この歌から保育の新段階へ……95
　　2）全体、一……96
12「お菓子をぴちゃり」　1）神の父愛にかかわり、フレーベルにおける近代神学の影響……100
　　2）生命の連環に気づかせる際の注意……101
13「鳥の巣」　1）保育者への呼びかけの開始……107
　　2）意識化という教育方法……107
14「花かご」　父親の愛……113

15「鳩の家」　自由遊びを成長に生かす「意識化」という教育方法……120
16「拇指、すもも」　子どもに対して指の名称を強調する……125
17「拇指、かがめ」　なし
18・19「なつかしい、お祖母さんとお母さん」
5という数字の生命的意義……132
20「拇指で一つ」　なし
21「指のピアノ」　1）拍子（タクト）の重要性……144
2）生命の諧和（かいわ）……145
22「無邪気な姉妹」　心の最内奥を育てる保育……150
23「塔の上の子ども」　恩物あそび……155
24「小児と月」　1）光の意味と、(24)－(32)が全体の中心の位置にあることについての断り……159
2）幼児期から月に魅かれること……159
25「小童と月」　はしご……165
26「二歳の少女と星」　幼児期の子どもの世界理解……170
27「光の小鳥」　保育の出発点であり中心点……176
28「壁の上の小兎」　人生の不条理に対する精神の力……181
29・30「狼と猪」　子どもの感性の純潔を大事にする……187
31・32「二つの窓」　父親の出番……194
33「炭焼き小舎」　1）職業、性別等に関する表現上の制約についてのお断り……199
2）職業労働の歌のまとまり……200
34「大工」　1）最も変化にとんだ指遊び……204
2）大工……204
35「小橋」　イエス・キリスト……209
36・37「二つの門」　1）身近な動物、植物……215
2）庭、園（その）……215
38「小さい園丁」　百合の花……220
39「ヘエチィ・ヘエチィ！（においの歌）」
植物も私たちを愛している……226
40「車屋」　1）車鍛冶、車大工……230
2）神話、伝承話等の保育への取り入れ……231
41「建具屋」　ダビデとゴリアト……235
42「馬乗りと善い子」　保育の新段階へ……241

43「馬乗りと不機嫌な子」　子どものかんしゃく、すねること……245
44「坊やお隠れ」　分離から合一へ……249
45「かくれんぼう」　子どもの隠しごと……254
46「かっこ、かっこ」　かっこう遊びとは……258
47・48「商人と少女」「商人と少年」
1）クリスマス・マーケット……267
2）クリスト・キント（おさなごイエスさま）……267
49「教会の戸とその上の窓」　1）初めて大人と一緒に教会へ行き始めた子どもの、宗教教育のあり方……273
2）子どもを大人の社会へ導き入れるに際して、親が心がけるべきこと……273
50「小さい画家」　人間の創造性……280

「終の歌」　なし

Mutter- und Koselieder

母の歌と愛撫の歌

1.　初生児を見つつ母の感ずること

神よ、わが神、汝は妻の我をば高く幸いし、
地上の生(せい)を天上の喜びをもて飾りたり。
人の位の最高に我を選びつ、
汝によりて我は天使を産みにけり。

夫よ、父よ、いとき浄(きよ)き愛のうましき融合の
印(しるし)となして我が渡す子に祝福を与えませ。
夫妻のこころ永遠に繋(つな)がんものはことごとく、
この子に総てあるなれば。

我が子よ、たとえ苦しみの中に生まれて来(こ)しとても、
いざや休らえ、両親(ふたおや)の胸によりつつ愛されて。
げにや、優しき心をば我等は常に抱(いだ)きつつ、
我等すべての命なる汝を育てん忠実(まめやか)に。

神なる父よ、生命のとわの泉よ、その泉
子にも流れよ、強くまた浄く明るく。
われらはなべて汝(な)が子なり、——汝が家族なり、
されば一つの愛をもて汝(なんじ)と我等とを一つにせん。

＊）強調文字についてのお断り

各歌の冒頭の１文字が大きな太字になっているのは、原著の各歌の冒頭のアルファベット１文字が大きな花文字に装飾されているのを受けてであって、文意の強調ではない。

2.

子と生命の一致を感ずる母

あはれ子よ、愛らしき子よ。
微かにもこころに告げよ。
暖かく汝より我に飛びちるは何にかあらむ。
春の日の曙光のごとく汝がうちに色づくは何。——
　眼より湧くは**信仰**、——
　何ごとの起こるとも、母よ、汝は楯なり。
　微笑める目の中に語るは**愛**なり。——
　一致せる汝と我を囲むは光のみ。
　この胸をめぐれるは**希望**なり。——
　生命の泉ここにそそがる。——
来たれ子よ、かく切に、頼りたのみ
人の世をながめいらん。——
汝が心母の仕業に何ごとを予感すとも、
母こそやわらかにその愛を促さめ、いつか言いつつ、
子の信仰と、希望と、愛とは
育てられずにはあらざりき。
子の信と愛と希望とには、
子として祝福されつつ、すでに天の開きいたりと。——

3.　我が子を見て至幸なる母

母が子と語るとき、
誰かその愛撫をば説き得む。
子の生命の光みれば
天の喜び母を貫き流る。
さればこそ母は全く身をささげ、
子の生命育つることに切実なれ。

子よ、我が子よ、我に言え、
などて汝がすべての斯(か)くは可愛ゆき、
など戯(たわむ)るる遊びにも、清き喜び
かく多く我が見出(みい)ずらむ。——
　莟(つぼみ)に似たる汝(な)が頭(かしら)*)
　花咲くごとく喜びを我に与う。
　愛らしく莟を平和の囲むごとく、
　愛児よ、汝が額無邪気にひかる。
　かおりつつ莟平和にひらくごとく、
　愛児よ、汝が眼(まなこ)は生命を我にそそぐ。——
　　母の喜び、高き幸、
　　汝が眼の光てり返す。——
　嬉しく咲き充ちて花の輝くごとく
　清らけし、健(すこやか)に薔薇(ばら)いろの頬は、
　明らかに花の中に太陽のうつるごとく、
　汝が顔より魂は光を発す。
　ほほ笑める可愛ゆき口は勝ちほこり、
　やさしき心の誓いを深く結ぶ。
　げに、いとど可愛ゆき頭よ、汝となりて
　小さき天使はあらわれぬ。
　やがて危険を冒(おか)しつつ目標(めあて)に至る

力は夙(はや)も動きたり、身体手足(からだ)に。
　かくも可愛ゆき子供より
　高く男々しき人間の姿こそ湧け。
　また弱さにぞ人間の品位は見ゆる。
　それゆえに我が心は汝(なれ)に傾く。
　我が身の中のきよき生命(いのち)は
　我が子よ、汝に現われぬ。
されば汝を育てゆき守ることこそ、
我に喜びと魂の平和を与うるなれ。

＊）強調語についてのお断り

本書の語には、アルファベットを太く（太字）したり、アルファベットの間隔をあける（隔字）等して3種類の強調が存在する。最も強いのは太字と隔字と両方を行っているもので、前の（2）の歌の「信仰」「愛」「希望」の3語のみである。2番目に強い太字強調の語はゴシック体で表示している。3番目の隔字強調の語は下線により表示している。

4. 子と遊戯する母

母よ、汝(な)が子に見る総てを吸え、
　吸え、高き生命の幸福を。
魂の平和と生命の幸福が高き宝なるを知り、
　そを汝が子の中に保たんがために。

子ょ、愛児(いとしご)よ、我は愛す。
真珠、黄金(こがね)にいやまして。
ただちに我子(あこ)と見知りうる
可愛ゆきものをみないわむ。——
そはこの頭(かしら)、汝には、

未(いま)だ重きに過ぎるゆえ、
わが軟らかき手へ置きね。
この眼、この額(ぬか)、喜びを
我が吸うところ。乳と血に
似る両頬よ、あな可愛ゆ。
小さく可愛ゆき両の耳、
やがてよき歌ききも得む。
この鼻口はしずかにも
美しきことをわれに告ぐ。
はや幾たびか口づけし
この唇は薔薇の赤、
小さく円(まろ)きおとがいの
くぼみのげにも愛らしさ。
明るく笑(え)める顔かたち、
金の髪ある頭蓋や、
頚(くび)は太りて軟らかく
それゆえまろく美(うるわ)しし。
また美しきこのうなじ、
そっと我が頬に押しつけぬ。
愛児のまろきこの背こそ
胸にうれしく抱きしむれ。
これは小さき手と指よ、
これにて巧みに子は遊ぶ。
これは、我が子よ、汝(な)が腕(かいな)、
暖かく抱(いだ)くは我がかいな。
またこの胸の高くして、
子の健康のうれしさよ。
胸にかくるる心臓よ、
憂(う)さ苦しさを知らであれ。
子の愛らしき眼のごとく

浄(きよ)く澄めかし永久(とこしえ)に。
かくれし生の泉をも、やがて感ぜむ
そも常に浄く明るく流れなむ。——
この小さなる両脚(あし)に*)
まもなく独(ひと)り立ち上がり、
この小さなる足をもて
まもなく歩むことならむ。
これは膝にて、これは股(もも)、
まもなく水も渡り得む。
足のつぼみは足指(あゆび)とて
九つならで十ぞある。

これにて我が子はすべてなり。
一年経(た)たば飛びはねて
楽しき小児(こども)の生活に賢きこころ示すらむ。
そは夙(は)や見えぬ動きつつ、
しずかに我はそを育てまし。——

*）原文は strampfelfuβ（ばたばたさせる足）。

5. 生(お)い育ちゆく子を眺むる母

子の中に力の開きゆくを見て
母は言う。“神よ子を守らせたまえ
小さき者を支配したまえ”——
されどまた母は確かに
この信に安んじつつも
おのが務めをせではえあらじ。——

我が子はも花と美(うるわ)し、
誰とてもそれをば見得む。
その頭まろく輝き、
その額滑(なめ)くあらわに。
朗らかの眼にて物を見、
耳をもて歌を聞きわけ、
鼻をもて花の香をかぎ、
口をもてうまき汁食い、
まろき頬は眠りて赤し。
何か子に足らざるありや。——
その上にきよく明るし
など我の愛さであらむ。——
小さき手をあけまた閉ざし、
物あまたつかみも得(う)べし。
小さき毬しかとかかえて
よろこびてまたと放たず。
腕(かいな)をも強くふりつつ
うえ下に動かし得べし。
小鞠もてぽんぽん打てど
己(おの)れも打たず卓(つくえ)に孔(あな)あけず。
脚をもて高く空に入(い)らまく。
　子よ、汝がうちの物なべて
　作るは汝の生の力ぞ。
　我等の喜びと平和のため
　我等はそを守らむ。
　清き生命(いのち)の願にぞ
　我が子もそれを知るならむ。
　学べ、生命をよく用い、
　高き快楽(けらく)を仕事より吸い入るることを。——

6. 子が母の膝の上に立ち又はその腕に休む時の母と子

いとし子と人らしく遊ぶ時
神々しさを感ずる母は幸なり。
人間の花に生命の太陽となる
高き喜びを感ずる母は幸なり。
太陽の光を送る方(かた)へ、げに
花はその内部(うち)を向くるものなれば。

子よ、澄める汝が眼を見せよ、
その眼より心をば覗(のぞ)かしめよ。
幸を薔薇の花より啜(すす)るため、
薔薇の唇もて我に微笑め。
また甘き汝が口をそと与えよ、
その上に祝福の接吻をせむ。
可愛ゆき手をも差し出せ、
やさしく心を結ばまし。
軟らかき腕を我がうなじに置け、
暖かき愛に汝をば抱くため。
また見せよ愛らしき耳、
やわらかき髪ある頭。
　　うるわしく我が子は
　　愛の光にて
生の新緑の間より
百合に等しく花咲けよ。
足もてしかと立ち上がれ母の膝に。
かく母と近くあるこそ幸なれや。
汝と母とのよろこびに、
汝の生命の日とならむ。

休め、やわらに母の胸に、
汝と、我が子よ、母との喜びに。

7.

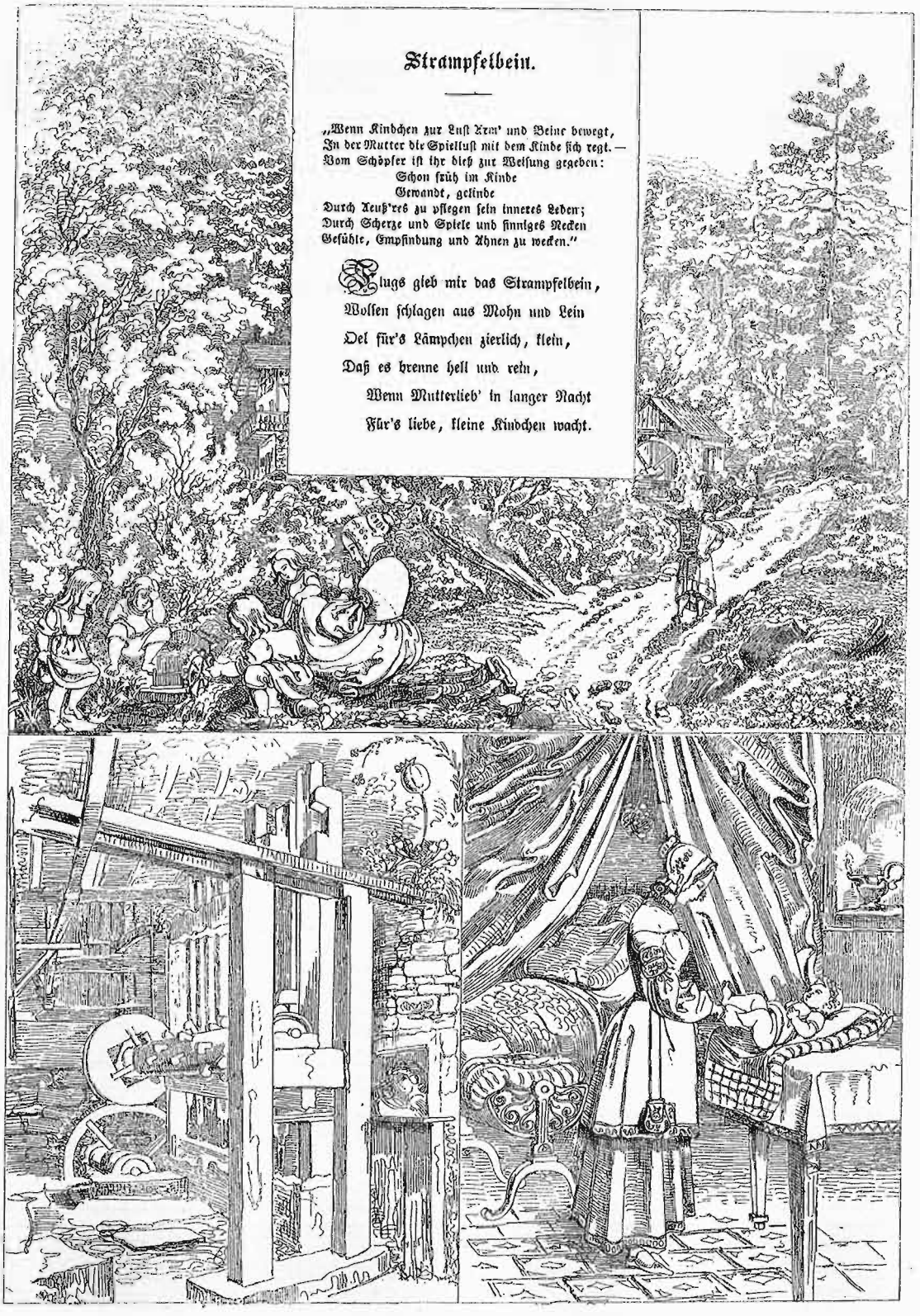
母の胸による子

母よ、汝が生命の花は身の養いを求むるのみか、
　　いな、子の本能を信ぜよ、
　　子はまた求む、愛を、
愛する敬神のさがしき心情を。

おお、見よや小さき子が
母の胸喜びていだくさまを。——
まどろめる愛の心ぞ
子を母へ共にひきつく。
いま乳を飲むさまを見よ、
母の教えを見守るならむ、
やがて子は愛しつつ母をいだかむ、
心の黙(もだ)せる願もて。
そしてやさしき母の情に
軟らかき心根を強めやすらむ。

Spiel-Lieder

遊戯の歌


Strampfelbein.
„Wenn Kindchen zur Lust Arm' und Beine bewegt,
In der Mutter die Spiellust mit dem Kinde sich regt. —
Vom Schöpfer ist ihr dieß zur Weisung gegeben:
Schon früh im Kinde
Gewandt, gelinde
Durch Aeuß'res zu pflegen sein inneres Leben;
Durch Scherze und Spiele und sinniges Necken
Gefühle, Empfindung und Ahnen zu wecken."
Flugs gieb mir das Strampfelbein,
Wollen schlagen aus Mohn und Lein
Oel für's Lämpchen zierlich, klein,
Daß es brenne hell und rein,
Wenn Mutterlieb' in langer Nacht
Für's liebe, kleine Kindchen wacht.

1.

足をばたばた

子どもが手足を動かして喜ぶと、
母にも子どもと遊びたい心が起る。——
これは造物主が母に与えたみ諭しだ。
　子どもの内にいち早く、
　上手に、ゆるやかに、
外の物で内の生命をやしない、
冗談や、遊戯や、聡明なからかいで
感情や、感覚や、予感をめざませとの。

急いで足をばたつかせ。
綺麗なランプの油をば、
あかるくきれいに燃えるよう、
芥子や胡麻から打ち出そう。
　可愛い小さい子のために、
　母さん夜長をあかすとき。

「欄外装飾画の説明」

足をばたばた

聡明に育む母よ！

生命はすべてのあなたの感情とあなたの知覚と思想の根源である。生命は、すべてのあなたの活動、仕事、行為の中心点、関係点である。したがって、あなたの感情、活動、あなたの思惟、行為、それらはいつも、1つの、非常に内的に一致したものである。そしてあなたの子どものおよそあらゆる生命現象は、内的に一致しているこれらの双方を、刺激し、興奮させるのである。

であるから、あなたの子どもの、しずかな、力強い――実際の力との割合からいっても――力強い烈しい生命現象が現われること、そして、それを注視することより以上の悦びを、いかなるものもあなたに与えはしない。もっとも、それはこういう現象が自然と生命の法則に合致した場合だけに限られているが。

そしてこういう現象がこのようにあなたに近づくとき、もしあなたが偏見、習慣、誤謬によって阻まれないならば、あなたは直ちに、あなたの幼児の動く生命をまた直接に保育し、いたわり、それを保育しながら強くさせ、それを発達させ、訓練し、陶冶し、こうして、あなたの子どもに、まず第一に少なくともこの生命を自ら知覚させるように、促したてられた心持ちになるのである。

いま既に水浴によって力強くされたあなたの子どもは、あなたの前で、彼の非常にさっぱりした褥の上に横たわっている。全身の健康を快く感じながら、彼はあなたの前に横たわっている。小さい両腕を動かし、小さい両脚をばたばたさせながら。

あなたも感じているように、彼は、自分の力を試すことのできる、そして、それによって、力を高めて、その力をよろこぶことのできる1つの対象を求めている。あなたが子どもの行為から、要求として、いわば願望として読みとるものに対し、あなたの母性愛は、いたわりながらそれを迎える。彼は交互に彼の小さい脚をあなたの手やあなたの胸に突っ張り、踏み、もがく。あなたの手や胸は、彼の脚の測力計であり、力を昂進するものである。

あなたは彼の力の表現の運動法則にしたがう。しかし、あなたはただ外的な身体の生活をかように保育するだけでなく、また彼の内的な感情、知覚、霊の生活をもおなじように保育する。彼は、あなたの力によって自分の力を認めるだけでなく、さらに、あなたの愛、あなたがこれらすべてを行なう心持ちをいわば感じなければならない。こうして、行為と言葉に旋律的な調子が加わってくる。どんなに彼の目ざめ生長しつつある力があなたにとって、いわば、あなたの愛の保育と愛の焔のための油になるか、多分、あなたは今からもうそれをあなたの幼児に感じさせ、少なくもやがて認識させたいと思うであろう。

あなたが幼児への愛から眠らずに番をしていた過ぎ去った夜々、小さなランプがあなたの傍らに立っていた。いまやこのランプが以上のことへの機会と形象を与える。

油を提供する植物。それは、菜種、あぶらな、亜麻、芥子、——その他、それがどのように呼ばれ、種々の地方においてそれが適用されてもあまり問題にはならない。——とにかく法則にかなった力の発達と相当な力の使用の結果、これらの植物から、不寝番のランプのために、養いの油が生みだされた。こうして、この幼児は後になって感じるであろう、彼に対するあなたの母の愛の保育は、彼が彼のすべての力を調和的に発達させ、相当に適用し、使用したことから起るということを。

この左手の搾油所には、安全な場所に、1粒の芥子と1粒の亜麻とが、根を下ろし、生長していく余地を見出している。この搾油所は、いつかあなたが子どもと一緒に実際の搾油所を見る日まで、それに対する理解力の発達したあなたの子どもに、それを——油と芥子にも関係させて——示す便宜をあなたに与える。

少年と少女は見たものを各自がそれぞれの方法で実現する。いわば我々を愛するすべてのものを作る自然の中の力は、子どもたちには理解されないかもしれない。しかし、母はそれを予感し感じさせるために、彼女の子どもの群れを付近の山の谷へ連れて来た。その山の泉の上手に、いま少年は彼の水車のために、それが水に押されて面白く動くような1つの場所を探しだした。彼の弟は眼をみはりながらその傍らにかがんでいる。まぶしさのために兄の作ったものを驚嘆することを邪魔されないように、眼を射るような太陽が顔にあたるのをさえぎりながら。1番上の姉は、一気に目的を達しようとしている。彼女は健康な両足を澄んだ小川へふくらはぎまで浸して、そのなかで細かい砂を捏ねて、形のある塊に形づくろうとしている。母は、愛するものたちに囲まれて、“幼年時代を同じように哺育しているにもかかわらず、どうしてこう違った子どもの生活が形づくられるのか”ということを、考えながら座っている。

無邪気な遊びを鏡として、彼女はこれらすべて3人の——水と水の力に魅せられた——子どもの将来の生活を見ている。

彼女はこう予感する。1番上の男の子は、間接に彼の精神によって、目標に導くものを使用することを覚えながら、いつか生活力を彼の目標にまで導いていくであろう。

少女は、彼女の目標を彼女自身の心の中に確保し、自力をもって専心しながら、彼女自身の生活と行為とによって、直接にその目標に到達するであろう。

弟は、力の本質とその作用の法則を究明することによって、このおなじ地点に行き着くであろうと。

遊んでいる子どもたちが、心の中で、おのおの1つのゆたかな生活を現在に生きているように、母は、それを、現在と将来だけでなく、過去においても生きているのである。

なぜなら、籠を持って通りすぎ、もういくらか山を登った女は、“一体、どちらへおいでになりますか”とたずねられて、こう

答えた。

“お金持ちの粉屋へ行って、私の持って来たものでいくらかの油をもらえるかどうか尋ねてみるのです。赤ん坊が大変悪いので、不寝番をしなければなりません。パンも要ります。実際、もう私は何も働きがないんですけれど、かわいそうな赤ん坊はどうしても食べなければなりませんから。”

この答えを聞いて、母の心の前には、彼女の足をばたばたさせる遊びが過去から浮かび上がった。そして、彼女の幼児たちを見やって、自分のことを考えて、彼女はたずねる。

“この子どもたちの将来の生活は、感謝をもって、母の愛に報いるであろうか。”

筆者による補足

各歌に見出される子どもの発達やそれに対する配慮は第Ⅱ部第4章～第6章に詳述します。ここでは、それら以外に、知っている方がより理解しやすいと思われることについて、簡単な説明を補足します。

1）生命

2）後姿の女性

1）生命

「欄外装飾画の説明」の冒頭の Leben（英語の life、ここでは生命）という語は、隔字強調されています。Leben は、フレーベルが本書全体の目的、目標、内容、方法等を語る「『母の歌と愛撫の歌』への指示」では、太字で強調して語る語でもあります。

生命はフレーベル思想の鍵概念の１つであって、彼は、キリスト教圏に生きた信仰者として、「神は万物を創造された、万物は神の被造物である」という世界観の中に生きています。だから、生命は神から与えられた最大の賜物です[1]。そうであればこそ、フレーベルは、万物に生命および生命作用に似た働きを見出しています[2]。そして、人間らしい人間に成長するということは、他の被造物全体と共存し、その中でも特に人間に与えられた使命を自覚して生きる人間に成長することだと考えています[3]。このような生命から欲求、感覚、作用等になって内外へ発出されるさまざまな「力」が次の歌で説明されます。

1）フレーベル著荘司雅子訳「子どもの第三遊具と子守歌」小原國芳、荘司雅子監修『フレーベル全集』第4巻、玉川大学出版部、1981、217頁。
2）フレーベル著荒井武訳『人間の教育』（上）、岩波文庫、1964、253頁－259頁。
3）同上、11頁－15頁。

2）後姿の女性

「説明」の終りに、川上の水車小屋へ歩いていく農婦に言及されています。後姿の人物とは、ロマン派の絵画ではその人物に注意を引きつける1つの型だそうです[4]。確かに、この遠くの後姿は、前景の母子5人に劣らない強さで私たちの目を引きます。

「説明」では、この母親について、病気のわが子のためのパンと徹夜の看病のためのランプの油を、僅かな品物と引き換えにお金持ちの粉屋に頼みに行くところだと語られています。楽でない暮しが窺われます。それに対して主人公の赤ちゃんの母親は、一見、子育てだけに専念しているような服装です。しかし、当時、家庭内労働を使用人に任せた上流階級の婦人は、子女の養育についても最初から乳母等他人の手を借りるのが当たり前であり、あるべき姿ともされていました。だから、この母親の服装は、フレーベルの乳幼児教育を行う社会階層をあらわしていると見るよりも、古典派絵画以来のひとつの傾向であった古典趣味のあらわれと見たほうがよいでしょう。

そして、暮らし向きにも子どもの健康にも恵まれていると見える主人公の母親は、この病児の母親に心を寄せつつ、将来、子どもたちが成長したとき、母親の愛に気づき感謝するだろうか、という思いを吐露しています。この点は、焔と油という表現とも相(あい)まって、わが国では母親が子どもを愛することだけを強調するのとは異なり、相互作用を重視しているといえます。

しかも、この相互作用に関連して、フレーベルは、子どもの立場から「人間の最初の基本感情は一致、共同、統一の感情である」[5]と述べて、赤ちゃんは生まれた最初から泣いたり蹴ったりして自分の力を外へ表すだけではなく、赤ちゃんの心に「共同感情が発達してくる」と述べています[6]。また、共同感情の一例として小さな少年が疲れている母親に向かって「僕がきっと母さんを守るよ」といったことを挙げた上で、その言を少年の幼少期の力の感情の表出とも述べています[7]。つまり、相互作用を当然とするのは人情に由来するというよりも、彼独自の「力」理解の中で考えられていたからでしょう。

4）木村和美「風景画の革命――＜海辺の僧侶＞――」神林恒道編『ドイツ・ロマン主義の世界――フレードリヒからヴァーグナーへ――』法律文化社、1990、31頁。
5）荘司雅子・藤井敏彦訳「子どもの生活から」『フレーベル全集』第3巻、玉川大学出版部、1977、363頁。
6）フレーベル著荒井武訳『人間の教育』（上）、岩波文庫、1964、35頁、36頁。
7）5）論文、362頁－363頁。

Bautz! da fällt mein Kindchen nieder.

„In jedem, was die Mutter thut,
Ein hoher Sinn stets wirkend ruht;
Selbst wenn sie „Bautz-fall-nieder" spielet,
Ihr Sinn ein höh'res Ziel erzielet.
So stets in allem, was sie schafft:
Nur stärken will sie Geist und Kraft,
Daß, wenn ihr Kindchen einst auch gleite,
Es sorgsam doch das Fallen meide."

Bautz! da fällt mein Kindchen nieder,
Fröhlich hebt's die Liebe wieder,
Und mein holdes Kindchen lacht;
Denn der Mutter Auge wacht,
Daß sich's Kindchen nicht thu' wehe,
Nur zur Lust es ihm geschehe. —
Bautz! da fällt mein Kindchen nieder,
Fröhlich hebt's die Mutter wieder;
So sich Geist und Leib entfaltet,
Sinnigkeit in Allem waltet. —

2. ばったりこ、坊やがころぶ

母のする何事にも
常に高い意味がはたらいている。
“ばったりこ、坊や”を遊ぶ時でさえ
母の心には高い目標がある。
母のすることは皆そうだ。
母はただ精神と力とが強めたい。
我が子が何時(いつ)か滑っても、
注意して倒れるのを避けるように。

ばったりこ、坊やがころぶ。
きげんよく愛が抱き起こす。
可愛い坊やは笑ってる。
母さんのお目(めめ)が見ていると、
坊やはちっとも痛くなく
ただ面白いばかりゆえ。——
ばったりこ、坊やがころぶ、
きげんよく母さん抱き起こす。
こうして心も身も育つ、
すべてに賢いことがある。——

「欄外装飾画の説明」

ばったりこ、坊やがころぶ

全身を強くするための身体の遊戯

人生においてしばしば卑近なことが見のがされるように、この歌においても同様なことが起こった。しかし、後になってからは、芸術家の理由――けっして軽視され得ない――から、ついにこの部分へ欄外装飾画を付け加えることはどうしてもできなかった。けれども、この小さい歌と遊戯は、身体の遊戯であり、これを削除することはおそらく不可能であったから、結局、それはここに欄外装飾画なしにしておく。しかし、聡明な母よ！　それは、それ自身によって、また題詞によっても、容易に説明され得るのである。ちょうど、それの実行が容易に描写され得るように。

親愛な母よ！　私の前にはこういうあなたの姿が浮かぶ。あなたは、褥を広げた卓の前か、または、あなたの愛する子どもの小さいベッドの前にいる。彼は小さい肩を一杯に張って、半ば腰かけ半ば横になりながら、褥の上、あるいは子どものベッドの上に、あまり高くなく、あなたの両手――まるで1つの小さい籠のようになっている―に抱かれている。あなたはあなたの手をベッドの上に滑りおとす。

そっと、しかし子どもの身体が実際それを微動で感じるように。

それとも、幼児はすでにあなたの前の褥または厚い掛け布団の上に横になっている。

あなたは彼の両手あるいは両腕を捕らえ、子どもが腰をかけた姿勢を保つように、彼の上体をそっと起こす。それから、あなたは再び子どもの手と腕をそっとあなたの手からすべらせて、再び彼をベッドの上に落とす。しかし、それは子どもがそれによって実際多少の微動を感じるように行なうのである。

注意深い母よ！　いまやあなたの保護とあなたの愛の下において子どもをこのようにすべらせることは、おそらく子どもを強くさせ、力の感情を高める。そのように、一方、あなたの将来の生活において、あなたはあなたの段々と伸び育つ子どもに、“滑るということは、もしこういう眼を欠いたならば、ややもすれば落下となる”ということを感じ、認めさせる境遇に十分出会うであろう。

あそこに、橇に乗った子どもが橇路を滑ってゆく。橇をみちびく眼と力が未だ欠けている。そして、果然！　彼は倒れた。幸福なことに、まだ彼の脚は少ししか痛まない。

“将来倒れないように、お前の眼を強くし、お前の力を強くするがよい。”

あそこに子どもが橇路を滑っている。不注意にも彼は周囲を見まわし、不注意にも足や脚を思うままに動かしている。彼は倒

れた。が、しかし幸運にもただ少しすりむけただけである。

“2度と倒れないように、お前の眼と眼差しを集中し、お前の足と脚を支配するがよい”と苦痛が彼に言う。

しかし、ああ！　あそこではつるつるした皿が少女の手から、鏡のように澄んだコップが少年の手から滑りおちた。しかも、彼らはそれらを非常に注意深く持ち、決してそれから眼を放さなかったのであるが。

“もし注意深さと真の恐怖に、弱さと無力が加わるならば、やはり同じく落下となる。”

母よ！　あなたはここであなたの子どものために絵を必要としているが、しかし、もしあなたがこういう絵を人生からまとめ上げるならば、あなたはここに絵がないのを淋しく思わないだけでなく、かえって、この小さい遊びの生命の果実をあなたの子どもに保障することができるであろう。

筆者による補足

1）遊戯に用いる身体部分の指示
2）力
3）「発達」が重視される理由

1）　遊戯に用いる身体部分の指示

「説明」の題の下に「全身を強くするための身体の遊戯」と書かれています。このよう身体部分が指示されているということは、その身体部位を用いること自体がこの遊戯の眼目にある、と見ることができます。このことについては第Ⅱ部第4章に詳述します。

2）力

力というと、現在ではたいてい物理学の範疇で考えられますが、西洋では永らく哲学の考察対象でもありました。その際、力の根源は事物の内にあるという考え方と外にあるという考え方と2つの考え方が存在しました。内にあるという考え方の基本は手足の力、つまり、手足が自分の思うように動くのは力の根源が自分の内部にあるからだという考え方です。それに対して、力の根源は外にあるという考え方も既にアリストテレスの時代から打ち出されていたといいます[8]。

ニュートンによる万有引力の発見（1687）は、一見、何でもない物体の落下という現象が

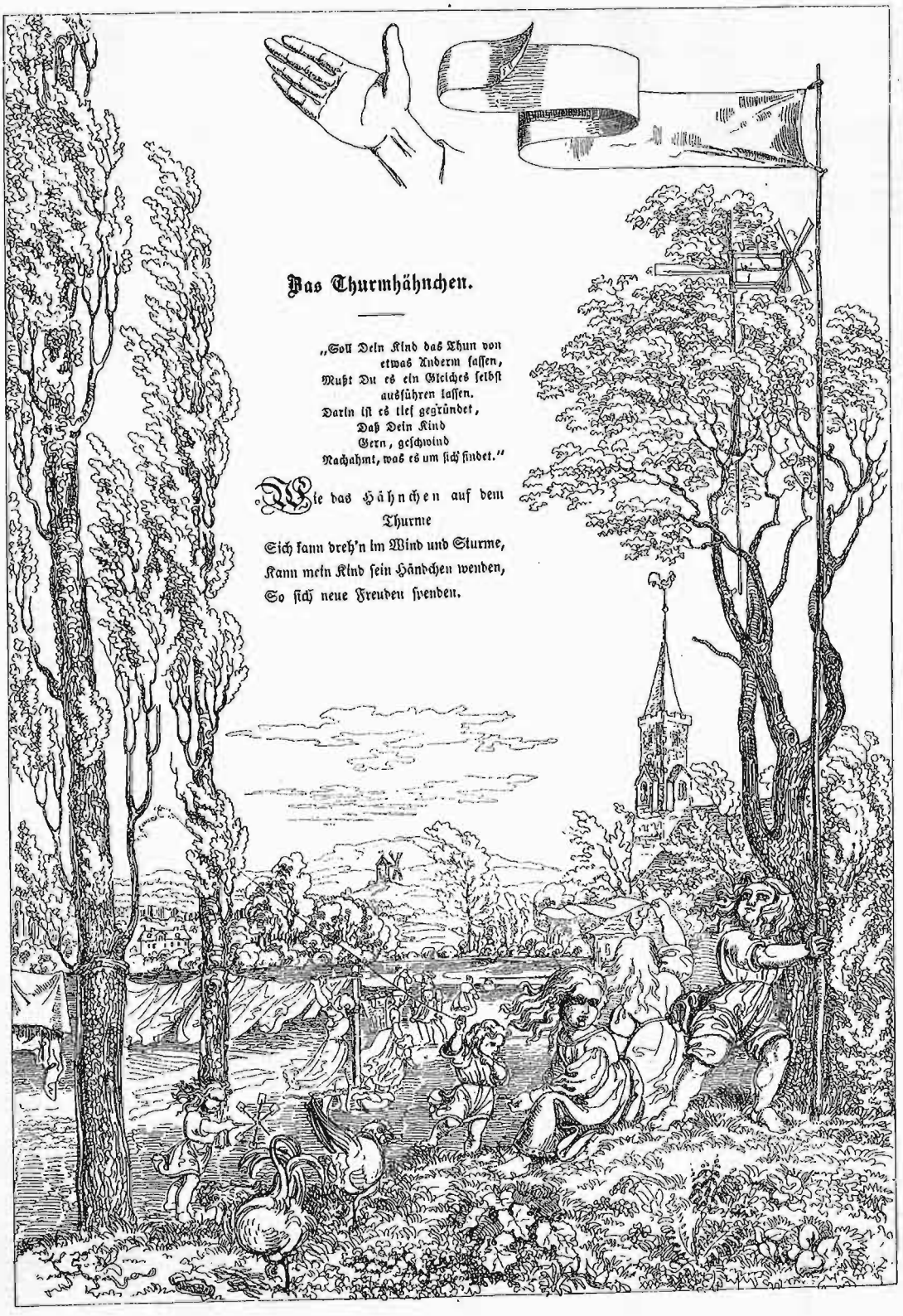
8）田辺行人「力」『大百科事典』第9巻、平凡社、1985、592頁。

壮大な宇宙と直結していることを科学的に説明しました。それは単なる物理学上の発見にとどまらず、以降、世間全体の人々の精神を科学的精神によって明るくすることにつながったことはこの『母の歌と愛撫の歌』にも窺われます。また、引力（親和力）が物理的概念にとどまらず人間の心の働きの力として取り上げられた例は、ゲーテの小説『親和力』に見出されます。

フレーベルは自然科学者であり信仰者でした。だから、人間もまた神に創られた存在として何らかに神の性質（神性）を反映すると考えました。ここに私たちは、既に（1）「足をばたばた」から、フレーベルが生命（神から与えられた最大の賜物（たまもの））の発出として「力」を取り上げているのに気づきます。つまり、身体、感情、感覚、欲求・衝動、精神などさまざまな方面にさまざまな形をとる力の発出は、フレーベルにおいては人間に具（そな）えられた神性（しんせい）の表出であるからこそ、生まれたときから教育的視野の中に置かれるべきことがらでした。

3）「発達」が重視される理由

キリスト教における万物（ばんぶつ）は神に造られた、すなわち神の被造物（ひぞうぶつ）であるという思想は、当然、宇宙のあらゆる力のあらわれに根源の存在を認め、この根源を神とします。この考え方に従うと、人間もまた神の被造物であるからには他の被造物と何らかに共通する性質を有するはずです。ここにフレーベルは、被造物であるからには人間と他の動植物、鉱物、宇宙等とに共通して神から備えられたものは何かと考えます。そして、その答えを、あらゆる存在には何らかに法則性が存在するということに見出すのです。この観点から、彼は、人間に備えられた「発達」という法則性を大事に考え、発達に従って成長することを合自然の、神の摂理（せつり）にかなう人間の課題と考えたのでした。


Das Thurmhähnchen.
„Soll Dein Kind das Thun von
etwas Anderm fassen,
Mußt Du es ein Gleiches selbst
ausführen lassen.
Darin ist es tief gegründet,
Daß Dein Kind
Gern, geschwind
Nachahmt, was es um sich findet."
Wie das Hähnchen auf dem
Thurme
Sich kann dreh'n im Wind und Sturme,
Kann mein Kind sein Händchen wenden,
So sich neue Freuden spenden.

3.

塔の上の鶏

子どもに他の物の仕業(しわざ)をわからせるには、
自身同じ事をさせなくてはならない。
あなたの子どもが
喜んで、早く
周囲のものを真似ると
それで深い基礎ができる。

塔の風見の鶏が*)、
風や嵐に廻るように、
坊やはお手(てて)を廻せます、
新たな喜びあるならば。

*）原語は Hähnchen。（おんどりさん）といった親しみをこめた語。

「欄外装飾画の説明」

塔の上の鶏

手関節と肘の運動を練習する遊戯

幼児の前腕はできるだけ直立し、その手は同じ方向に、4本の指が小さい鶏の尾を、掌がその胴体を、親指がその頷と頭をかたどるように、広げられている。こういう姿勢において、あなたはあなたの幼児の手を向こうへ動かしたり、こちらへ動かしたりさせる。

“しかし、この遊びはまたあまりに単純である！”

けれども、それはあなたの幼児を悦ばせる。それは、常に新たに彼をよろこばせ、長い間彼をよろこばせることを止めない。あなたの幼児はまだ少しも話すことができない。しかしあなたが彼にむかって“風見の鶏（これが旗であるところも多い）はどうするかして見せてちょうだい”あるいは“風見の鶏をして見せてちょうだい”といって促したてるとき、まことに彼はどんなに喜んで、いやそればかりか、どんなに真剣に小さな手を動かすことであろう。これらすべては果たしてなぜにこうであろう。

いま、あなたがあなたの子どもの前で1つの物を動かす、しかもそれを動かす根源がいくらかその物から離れている、というような場合に、子どもはその物の運動の観察そのものよりも、それを動かす根源を調べることの方をもっと悦ぶものである。かつて今までに、あなたはこういうことに気が付かなかったであろうか。

この場合の理由は、1つの結果の根源、1つの影響の原因を感じ、支配することである。これこそあなたの子どもを、悦びと真剣とで充たすものなのである。まことに、彼はもう実際、いわば、“動かされる物には1つの動因、動力が根源に横たわっている”という認知を表現している。そして彼はやがて“生活しつつある生き生きした物には1つの生き生きしつつある、生き生きした、生命を与える力が根源に横たわっている”という結論に到着するのである。

すこし風のつよい、ほとんど荒れ模様のある日、あなたの愛する子どもたちは、あなたの居住地の前の物干し場へ附いてゆく。というのは、子どもたちはいつも仕事に身をゆだねている母に附いてどこへでも喜んでゆくのだから。

聞くがよい！　塔の上の風見の鶏がいかにきしる音をたてているか。風がそれを彼方此方へ動かす。ここへ、また1羽の雌鶏が、その誇らしげな雄鶏と一緒にやって来た。しかしこれらの鶏は、風見の鶏のように、すばやく風の波に身を処することができない。少なくとも風が彼らの尾を彼方此方へ回転させる。しかし、何と風が洗濯物をばたばたさせていることだろう。それは声高く無駄口をききながら、烈しい風の

話をしているように見える。このばたばたいう無駄口はどんなに子どもを悦ばすことであろうか。少年は水浴のために使うつもりでタオルを持って来たが、風が強いので駄目になってしまった。そこですぐ彼はそれを1本の棒の先に結びつけて、高くなびかせ、空中で無駄口をきかせている。一方、少女のハンカチと伸ばしきった腕とは、おなじような悦びを彼女に与えているにちがいない。

少女がハンカチに、少年がタオルに与えている以上の自由を、別な少年はその凧に与えている。しかし凧はその代り高く揚がって、一層大きいたのしみを彼に与えているに違いない。

“から、から、から。”あそこに聞えるのは一体何だろう。風が風車の翼をはげしく追いまわすために、ふるえて、急調な、からからいう音をたてている。しかし大人がどんなことを行なっても、子どもはすぐにそれを模倣しないでいるだろうか！（であるから、大人のあなたが子どもたちの眼の前で行なうことには、注意しなければならない）。ああ、もうここに1人の少年が紙製の風車を持ってやって来た。少年が速く走れば走るだけ、風車はまた何と一層速く廻ることであろうか。

むこうの方では、母が彼女の小さい女の子を風の力から守ることができない。そして、大人の男でさえも、風のために転ばないように、しっかり平衡を保たなければならないのである。

“ママ、だけど今日もまた風が強くて、何もかも薙ぎ倒していますね。ほら、あっちにいる姉さんの髪がまるでママの洗濯物のようにひらひらしてるじゃありませんか。一体、こんなに何もかも動かす風は、どこからやって来るんですか。”

私の子どもよ、たしかに、私が自分の理解している通りに言おうとしても、お前には分からないだろう。たとえば、“空気の圧力、あるいは、空気の密度の変化、あるいは、空気の温度状態の変化、それらがこういうことを引き起したのだ”と言っても、お前はそのすべての言葉の1語をも了解しないだろう。しかし、つぎのように言えば、お前にはすぐ分かるであろう。

“ただ風のようなものでさえ、力が一致して大きくなれば、たとえそれは眼に見えなくても、大きいことや小さいことや、種々のことを引き起すことができる。私の子どもよ、こうして、世には知覚することはできても眼に見えない多くのものがある。また知覚することも眼に見ることもできながら、お前に言葉で説明し、明瞭にさせ得ない多くのものがある。ご覧、お前の手は動くけれど、お前はそれを動かす力を見ることはできない。であるから、お前がいま力を見いだす場合には、ただそれを注意し、はぐくむがよい。やがて、たとえそれを見ることができなくても、それが何処から来るか、だんだんお前にも分かるようになるであろう。”

筆者による補足

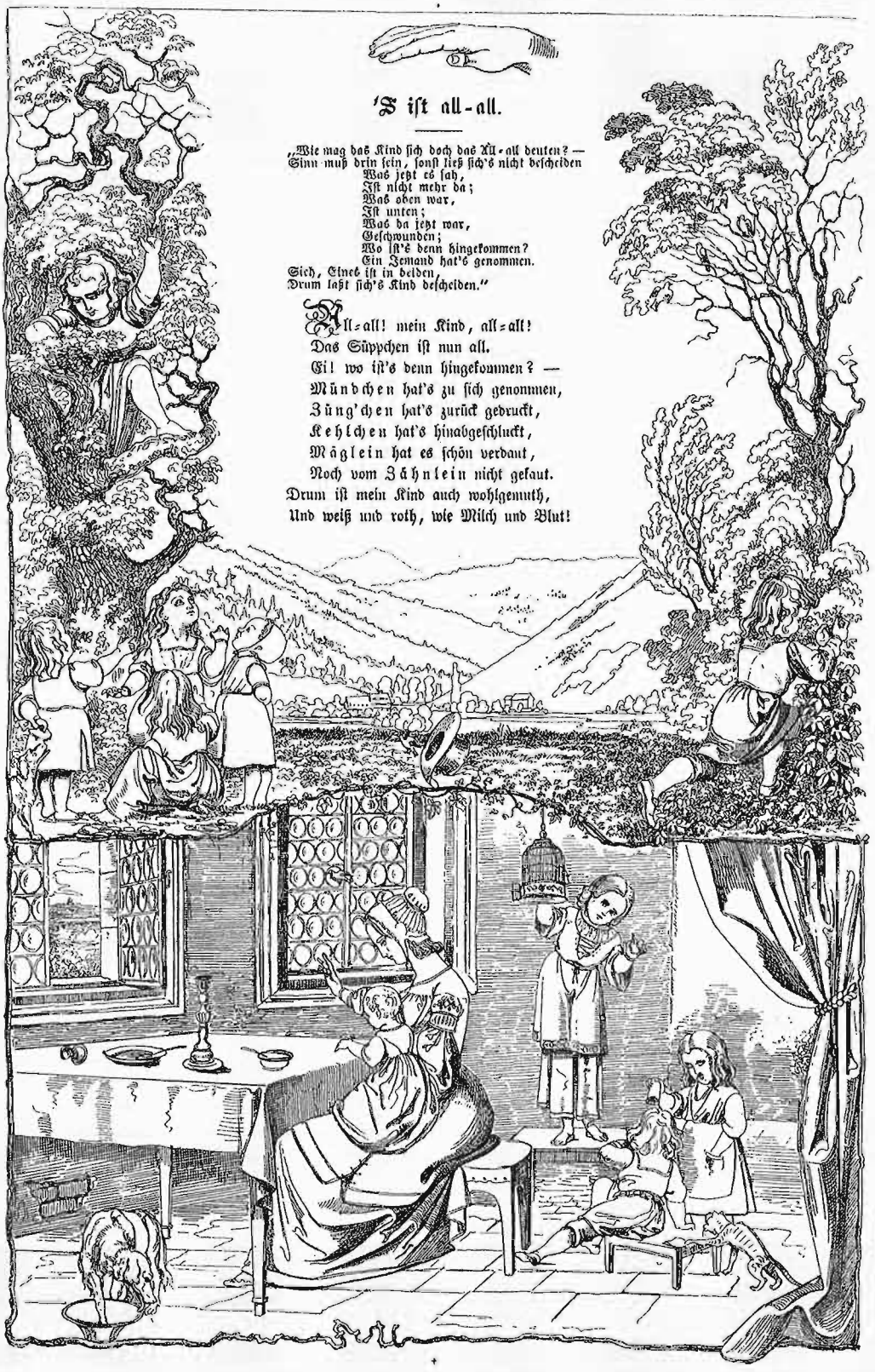
初めての真似あそび

この歌から初めて、見たものを真似る遊びに入ります。この歌詞は子どもに歌って話しかけるような形式なので、親が鶏に赤ちゃんの注意を向け、この歌を歌いながら手で鶏の真似をしてみせるとそれを赤ちゃんも真似る、という遊びでしょう。ここでの赤ちゃんは「まだ少しも話さない」といわれており、また、赤ちゃんが自分を抱いている人などに第三の対象を指差して共有しようとするのは生後10ヵ月頃からといわれるので[9]、それ位まで成長していると考えられます。

もう少し後になって子どもが歩き始めた頃の注意として、フレーベルは、子どもが何か対象に近づいたときに大人がその対象の名前を言ってあげたり特性を言ってあげることは大事だ、それは言語能力を発達させるためではなくその対象の部分、特性、その印象などを理解させることなのだと語っています[10]。

真似あそびがこの歌以降始まるのも同じことで、それによって対象を理解していくためで、その際、自分と気持ちを通じ合わせる親しい他者として相手を知っていく（第Ⅱ部第5章子どもの「他者との人格的関係」参照）ことがフレーベルの乳幼児保育の鍵です。

9) 田中昌人・田中杉恵著『子どもの発達と診断2　乳児期後半』大月書店、1982、182頁－183頁参照。
10) 荘司雅子・藤井敏彦訳「運動遊戯」『フレーベル全集』第4巻、玉川大学出版部、1981、382頁－383頁。


'S ist all-all.
„Wie mag das Kind sich doch das All-all deuten? —
Sinn muß drin sein, sonst ließ sich's nicht bescheiden
Was jetzt es sah,
Ist nicht mehr da;
Was oben war,
Ist unten;
Was da jetzt war,
Geschwunden;
Wo ist's denn hingekommen?
Ein Jemand hat's genommen.
Sich, Eines ist in beiden,
Drum läßt sich's Kind bescheiden."
All-all! mein Kind, all-all!
Das Süppchen ist nun all.
Ei! wo ist's denn hingekommen? —
Mündchen hat's zu sich genommen,
Züng'chen hat's zurück gedruckt,
Kehlchen hat's hinabgeschluckt,
Mäglein hat es schön verdaut,
Noch vom Zähnlein nicht gekaut.
Drum ist mein Kind auch wohlgemuth,
Und weiß und roth, wie Milch und Blut!

4.

おしまい

子どもはおしまいを何と解釈するだろう。——
それに意味がなくては、子どもにはわからない。
今見たものが
もう無い。
上にあったものが
下にある。
今あったものが
消えている。
どこへ行ったろう。誰かがそれを取ったのだ。
ご覧、両方には一致点がある、
それで子どもにはわかるのだ。

おしまい、坊や、おしまいよ。
スウプはこれでおしまいよ。
あら、どこへ行ったでしょう。——
お口がそれを食べました。
舌がそれを押し入れて、
おのどがそれを呑みこんで
お腹がきれいに消化(こな)したよ、
小さい歯では噛まないが。
それで坊やはきげんよく
乳と血のように、白くて赤い。

「欄外装飾画の説明」

おしまい

手の関節を訓練する遊戯

手を水平にしたり垂直にしたりして方向を変える運動が、1つの否定的運動として用いられ、または何か物がすでになくなったこととか、誰かがもはやそこに居ないこととかを意味するために用いられることは、一般に知られていることである。

この小さい遊戯は、ただ腕の姿が異なるだけで、前の場合とおなじくその運動によって、子どもの手の関節を発達させる。しかしこの場合それは、それに結びつく表現と考察によって、前の遊戯とは正反対のものである。前には広くひろげられた現在的なものであったが、ここでは欠陥である。前には持続的なものであったように、ここでは一般的休止である。前の場合には生き生きと現在が指示されたように、ここでは既往が、過去が一般的に表現され、全然1つの現在と比較された1つの以前のことと、過ぎ去ったことの指示である。つねに過去には何かあったが、今はもはやない、というのである。スウプはもうおしまい*)になった、皿はからになった、灯は燃え切った、パンはもう残っていない、というように。

パパと一緒に野原へ行った犬のムンタアまで、自分の食物を食いつくしてしまった。まだひもじいように見えるが、もう何も残っていない。少年はのどが渇いた。“姉さん、どうか少し水を下さい！”彼女は少年の前に、自分が納得のできるように、空っぽのコップを逆さにして見せながら、“もう少しもないの”という。この報知があまり意外で面白くなかったために、彼はつい後に置いてあったバタパンのことを忘れてしまった。ずるい猫はこれに気がついたと見え、こっそりしのび寄って、バタパンをくわえ去る。――それを食い尽くすために――。やがて少年がパンを欲しくなって後を向くと、今度も彼には“みんななくなった！”ということになる。

しかしそこの少女はかわいそうである。彼女は非常に好意をもって、彼女のさえずり鳥に餌を与えようとしたが、妹の空のコップを見たために、かごの小さい扉を不注意にもあけたままにしておいた。“ねえ、お前のさえずり鳥は一体どこへ行きました。”

“あ、もういないわ、逃げてしまったの！”“姉さん、いらっしゃい。”と兄は慰める。“外の古い木の上に、たくさん小鳥のいる小さい巣があるんです。その巣を持ってきてあげましょう。そうすれば、1つの鳥の代りにたくさんの鳥になります。さあ、さあ、行きましょう！”

実際、みんなここにいる。しかし、あまり夢中な期待を持っているので、子どもたちに附いてきた、まだお腹のすいている犬

が少年の手からパンを食い取っても気がつかない。そして彼がやがて後を振り返ったときに、今度も“もうなくなった”ということになるのである。兄はもう木に登っている。“おや、おや、もう1羽もいなくなった！　みんな逃げちゃった。”すると、弟がいう。“だけど、どうしても小鳥の中の1羽はなくちゃいやだ。ごらん。とうとうつかまえて、帽子の下へ押さえた。あとで妹にやったら、きっとうれしがるよ。ここにきれいなえぞ苺があるのは、何とうれしいことだろう。どうしても摘まなきゃならない。可愛い小鳥、ちょっと暗闇の中でがまんしておいで。”

しかし、風がしのぶように掃(は)いて過ぎ、帽子をひっくり返し、小鳥は空へ逃げてしまった。少年が帰ってくると、“ああ、もう小鳥がいなくなってしまった！”

“ママ、僕はもうこの絵を見たくありません。ここじゃ、いつもみんななくなって、男の子が持っているものや、持ちたがっているものが、何にも残っていないんですもの。”

“よくお聞きなさい。何か持ち続けたいと思ったら、できる限り節約し注意深くなけりゃいけません。欲望のために誘惑されてはいけません。ある場合に何か欲しいならば、適当な時に用意しておかなければなりません。自分の咽喉の渇きを消そうという希望が失敗したために、男の子は自分のパンを忘れました。不注意のために女の子はさえずり鳥を逃がしました。男の子は小鳥を巣から取り出して籠(かご)へ入れる権利を持たなかった。小鳥どもの力と勇気とは彼らの自由を保障した。あまり期待に心を奪われた男の子は、犬にパンを食われました。そして、えぞ苺のくさむらの誘惑に抵抗することができなかったために、少年は、妹をよろこばしてやろうと思っていたのに、それがだめになりました。”“ママ、もう1度向こうへ飛んでゆく小鳥をよく見せて下さい。”

---

*）元訳では「みんな」と翻訳されているが、原語はall　であるので、「おしまい」に訳語を変更した。

筆者による補足

自由

説明の最後に、自由ということが、むしろ唐突(とうとつ)な印象を与えて出てきます。帽子の中に捕えられていた小鳥が風で帽子がとんだために逃げることができた、というところで、「小鳥どもの力と勇気とは彼らの自由を保障した」と語られている点です。当時のドイツは、現在の州がそれぞれ独立した存在の、日本でいうなら江戸時代の幕藩体制国家のような時代であって全州が統一されたドイツはまだありません。フレーベルの言葉を借りるなら母国はあ

るが「祖国ドイツ」はまだ無く、内的にはその実現を待ちつつ外的にはフランスとの緊張関係にあった時代です。この時代のドイツの人々にとって、「自由」は、現在の私たちが想像するよりももっと輝かしくもっと大事な概念だっただろうと思われます。

非力なものであっても自分の自由を得、守るためには全力を尽くす。それ位自由とは大事なものだということを母親から語られることによって、子どもは、それまで絵の中の子どもたちに重ねていた自分の思いを、立場を変えて小鳥の立場になることを可能にされます。すなわち、他者の思いや立場を思い図って理解することができるようになります。

自由については、この後、(10)「小魚」では、自分に合ったところにいる場合の身体的自由が精神的自由をも伴っていること、反対に自分にとって合わないところにいる場合の身体的不自由が精神的不自由をも伴うことが語られます。

(15)「鳩の家」になると、主人公の子どもは、既に1人で近辺の池や川等まで散歩に出かけて鳥や小動物を心ゆくまで眺めて帰って来るまでに成長しています。もちろん4歳から5歳にかけての子どもですから親が安心していられる範囲の散歩ということになります。フレーベルは、子どものこのような外出に ins Freie gehen（自由の中へ出て行く→外出する）というドイツ語の表現を用いています。ここで、子どもは、自分が散歩に出かけて（身体的自由によって）得た刺激を知的・心情的知識に高め得た充足感によって、母親が家にいなければならない身体的不自由を精神的不自由・不満足感として思い図っています。そのように相手の立場や思いを思い図ることができたからこそ、子どもは母親から「お前の年頃には外へ出かけなさい。でも大人の私は家の中にいる」と、身体的不自由が必ずしも精神的自由を束縛するものではないことを教えられています。

この後、自由については、成長の最後の段階になる（42）（43）（44）の「騎手と子ども」の一連の中で、自由の体現者としての騎手が子どもにとって輝かしく、まぶしく、力強さに満ちていると同時に、圧倒的な力により畏怖せずにおれない存在かつ社会的判断の体現者として語られます。

Schmeckliedchen.

„Durch die Sinne spricht Natur sehr klar zum Kinde,
Mutter, mach', daß diese es durch jene finde.
Durch die Sinne schließt sich auf des Innern Chor,
Doch der Geist ist's, der dieß zieht an's Licht hervor;
In den Sinnen liegt des Kindchens Seele offen,
Pfleg' die Sinne treu, so kannst Du sicher hoffen,
Daß Dein Kindchen einst viel Schmerz, viel Leiden meide,
Ja, daß selbst sich's Klarheit, Lust und Freud' bereite; —
Denn durch alles, was uns sagt Natur,
Zeigt sich Gottes Vaterliebe-Spur.
Mußt nur früh des Kindes Sinn erwecken,
Durch das Aeuß're Inn're zu entdecken.
Wird Dein Kind hier früh Verknüpfung ahnen,
Wird's zum Ziel den Weg sich sicher bahnen;
Wem Natur Gesetz aus Gott verkündet,
Der in sich den Frieden Gottes findet."

Kindchen, öffne Deinen Mund,
Will Dir thun was Gutes kund: —
Beiß' in's weiche Pflämmelein
Und gebrauch' das Züng'chen Dein.
Sag', wie schmeckt's? — Dza, dza, gut, gut;
Süß schmeckt's, wohl der Zung' es thut.
Nun beiß' in den Apfel auch,
Ihn zu essen ist auch Brauch:
Ei, wie zieht's den Mund zusammen,
Wie Papier des Feuers Flammen.
Sauer, sauer schmeckt's gar sehr, —
Süß, liebt's Kindchen weit, weit mehr.
Doch den bittern Mandelkern,
Den hat's Kindchen auch noch gern;
Bitt'res ist dem Kind' gesund,
Zieht's ein Wenig auch den Mund;
Bitt'res oft das Kind begrüßt,
Leben es doch bald versüßt.
Unreif aber herb durchdringt,
Weil's genossen Uebles bringt.
Unreif muß mein Kindchen meiden,
Unreif bringt dem Kindchen Leiden;
Drum mein Kindchen nichts genießt,
Was durchaus gereift nicht ist.

5.

味の歌

官能[*1)]から自然は小児に語っている。
母よ、小児に官能で自然を知らせよ。
官能から内心の門がひらく、
しかし心を光へ引き出すのは精神だ。
官能のうちに小児の魂は開いている。
官能を養え、そうすればお前の子が
多くの苦痛と悩みを避け、
透明と喜びを得ることさえ望まれる。——
　自然が我々に語るすべてから
　神の父の愛の跡があらわれる。
　小児の官能を早くさませ、
　外界のもので内心をひらくように。
　小児は早につながりを予想して[*2)]
　目標への道を確かにひらくだろう。
　自然が神の法則を告げる人は
　神の平和を自分のうちに見出すのだ。

坊やお口をおあきなさい、
お前によいこと教えよう。——
軟らかいスモモをお噛みなさい、
坊やのお舌をつかうのよ。
ね、どんな味。——そう、そう、よしよし、
甘いね、お舌が気持よい。
　今度はりんごもお噛みなさい。
これも食べるが習わしよ。
あらまあ、口をすぼめたの、
焔にあたった紙のように。
すい、すい、大へんに——
甘いのが坊やはお好きだね。
　それでも苦い桃の実[*3)]も
坊やはやはりお好きだね。

お口を少しゆがめても
苦いもの子どもにお薬よ。
苦いものときどき来るけれど、
これもこの世を甘くする。
　熟(う)まぬと渋さ[*4)]がしみ透る。
食べれば病気になりまする。
熟まぬのを坊やはやめましょう。
熟まぬのは病気を持って来る。
十分熟んでいないのは
何にも坊やは食べません。

*1）原語は die Sinne.（諸感覚）の訳語の方が現在ではわかりやすい。

*2）原語は ahnen（予感する）。フレーベルの幼児教育の一つの keyword である。

*3）桃の実の原語は der Mandelkern. 巴旦杏（ハタンキョウ）の種、杏仁。

*4）原語は herb.　形容詞「渋い」

「欄外装飾画の説明」

味の歌

この歌と遊戯においても、“ばったりこ、坊やがころぶ”の場合と同じようなことが起った。そのために、これもあの歌のように、欄外装飾画なしのままである。しかしここではそれが欠けていても、前の場合より、いわば一層さしつかえないのである。というのは、この素材そのものが非常に生活に近いのである。

愛する母よ、あなたはあなたの幼児をなぶり遊びながら、“さあ、噛み切ってあげましょう！”または“小さな梨をかじってあげよう”といって促したてるときさえ、彼と一緒にすべてのものを遊戯として行い、彼の人生にとってもっとも重要なものを愛らしい遊戯に装わせる。およそ誰でもこのことを知り、そして悦んでいる。“ああ、あまい、なんて甘い味でしょう！”

さあ、坊や、あざやかな実をお摘み。
あかすぐりの実を。
口を急いですぼめるね。
けれど、すぐまた次を摘む。
汁は大層気もちよい。
あまさに酸いさが交じるけど。

母よ、こうしてあなたはあらゆる感覚を、しかし特に味覚を、戯れ[*1]また冗談を言いながら保育し、発達させ、完成しようとつとめる。しかし母よ、あなたの子どもにとっていろいろな感覚、特に味覚、の開発よりも、もっと重要なことがあるだろうか。

それも、ことに、道徳的意味に転化した場合はなおさらである。だれが“卑しい低級な趣味”をよろこんで分け持とうとするだろう。そして、自分が正当に“彼は繊細な高貴な趣味、すなわち1つのよい趣味を持っている”と言われたとき、だれが悦ばないであろう。

それでは人間において特にその趣味の完成が賞賛されるのは、一体どういう理由からであろう。それは趣味によって、事物の内部、いわば、本質・魂・精神・事物を活気づけるもの、事物を開示[*2]するもの、が示されまた啓示されるからである。すなわち、感覚によって事物の本質とその内部が、私らの内部へ明らかに知らされるということこそ、実に感覚の仕事であり、高い意義である。しかもこの場合に、味覚においてさえ、外的なもの、素材そのものを自分に取り入れるには及ばない。つぎのことは感覚のもつ非常に注目すべき性質である。すなわち、もし人が感覚そのものを発達させ、それからその指図にひたすら従うならば、感覚によって、事物の内部と本質が彼に告げ知らされる。しかも、この本質が事物そのものの享受によって彼に不利益を及ぼしたり、健康を脅かしたりしないうちに。あるいは、彼が享受することによって事物そのものを破壊するに及ばないうちに。——ちょうど、事物が非常にしばしばそれの内部の本質を外的に明確に示すということ、それも特にそれの享受が健康に有

害なときにそうであることが、事物そのものの同じく重要かつ照応的な性質であるように——。

実際、私らがよく知っているように、すくなくも大部分のもっとも害のはげしい有毒植物は、陰うつな、かなしげな、しばしば、むしろ狭められた、いわばもつれた外見を持っている。ベラドンナさえ、美しい丸みと輝きを帯びてはいるが、この性質を分けている。また桃のように赤い花を持つ鬼しばりについても同じことが言われる。朝鮮朝顔と黒ひよすにおいては、その程度がなおはなはだしい。しかし、その姿がなお隠れているときには、嗅覚がその吐くような印象を受けることによって、一層明瞭に示される。そして、味覚も、享受されるべきものがそれ自身としては健康であって、享受されるものの過剰が、すくなくも同時に不愉快を伴い、こうして、吐き気と飽満が生じる場合に——たとえば、蜂蜜においても、そうである——始めて不健康になる時一層明瞭に示される。　いまや、すでに、視覚といわず、特に嗅覚、味覚といわず、感覚を発達させることが、多くの不利益と不健康を避けるために重要なことがわかった。そのように、また感覚の発達は、とりわけ、情操と精神そのものを伸展し高揚させ、実行力への意志を目覚めさすために重要なのである。というのは、全自然界において事物の本質が示されるのは、まさに結合・素材・嗅覚・味覚・形式・姿態・大きさ・数・音響・色彩および事物相互の無限の（変転関係や交渉[*3]）によってのみだからである。

したがって、すべての感覚を正しく力づよく、早くから慎重に発達させることは、人間の小児時代にも成年時代にも、何より重要であるが、特に、つぎの場合においていちじるしい。それは、こういう開発が野蛮人におけるように、肉体的物質的方面にのみ甘んぜずに、その中に明らかに横たわっている事物そのものの最も内部のものと本質を探求し認識することによって、それが非常に熱心に利用されるときである。しかし、こうした探求と認識は、ただ感覚の注意・結合・比較によってのみ可能であるにすぎない。

すなわち、あの有名な賢人が人間について、“あなたが話しさえすれば、私はあなたが何者であるかを言うことができる”といったように、我々は事物とその本質を、ただ感覚の前に横たわる諸々の性質によって認識し得るのである。そして、もし人間が単にこの事物のことばを理解するだけでなく、それに規定されながら、事物そのものとそれの本質と精神を、自分から遠ざけ、または自分に作用させるならば——したがって、いずれの場合も、自分を行為にまで規定させることになる——、彼はこの認識によって真に善良な、実際繊細な趣味の人間になるであろう。というのは、感覚の中には、いわば人間の魂が、いな、精神活動が、すでに子どもにおいても、明らかに存在し、したがって感覚はまたいわばもっとも精神的なものそれ自身の認識へ導くものだからである。そして、特にこのことは、肉体的および精神的関係から見た味覚においていちじるしい。母よ、であるから、あなたの子どもの味覚をはぐくむがよい。

しかし、感覚の開発ということは――この味の歌が、モットーと結びついて示そうと努力しているように――、事物の種属の相異という問題、それらの相互における、ならびに、とくに人間に対する関係および作用と問題の認識のためにだけ重要なのでは決してない。感覚の開発は、さらに今一つの関係において、同じく重要なばかりではなく、おそらくさらにはるかに重要である。それは身体の開発の程度と段階に関してであり、あらゆる事物の既得の成熟程度に関してであり、特にまたそれが人間の生活・境遇・現象に適用される時である。もしこれらのものを明らかに、ひろく凝視(ぎょうし)するならば、数多くの人間的禍(わざわい)と悪――大小の団体における個人のそれ、とりわけ、家庭的・市民的生活・実業ならびに職業界のそれ――の最後のそして確かな原因が示されてくる。すなわちその原因は、人間的活動のあらゆる段階に対する生命の成熟が得られない前に、事物の生命を不当にも使用し、または、それへ不当にも干渉することにほかならない。

あなたの子どもたちのために心から気づかう親愛なる母よ！　まことに、事実はこういうありさまなのである。個人、家庭、市民社会、実業ならびに職業界の数多くの破壊的禍悪(かあく)は、つぎの点にその確かな原因を持っている。すなわち、それは、事物が、まだ生命の成熟しない前に、妨害され、規定されて、干渉されること、ならびに、未熟な事物にむかって、他の事物へ規定的作用を与えることを許すこと、なのである。

母よ、であるから、もしあなたがあなたの子どもたち、彼らの各個人、ならびに彼らの将来の家庭の将来の幸福を保全したいならば、あなたは、あなたの子どもたちに、彼らのようやく始まりつつある自由な自己の活動と、特に自然物の獲得に関して、つぎのことを注目させなければならない。すなわち、未熟から成熟までの一定の発達段階を注目させるだけではなしに、特に、あらゆる関係と生活状態におけるすべての未熟なものの使用が自然に反すること、および生活、すべて肉体的な生活および同様に精神生活、社交生活に対するその破壊的な反作用が自然に反することを注意させるがよい。そうすれば、あなたは、母としての活動によって既に、人類最大の恩人の１人になるであろう。

---

*1) 元訳では「非難し」となっている。しかし原語は tandeln なので「戯れる」の方が適当と筆者が判断し、訳語を置き換えた。

*2) 元訳では「破壊する」となっている。しかし、原語は offenbaren なので、「開示する」の方が適当と筆者が判断し、訳語を置き換えた。

*3) 元訳では括弧内の語がない。しかし原文には Wechselverhaltnisse und Verziehungen という語があるので、訳語を入れた。

筆者による補足

趣味について

フレーベルが味覚を五感の中でも特に大事と考えたのは、ドイツ語の味覚という語（der Geschmack）が趣味という意味をも表現するからであることは文章から明らかです。それを踏まえて彼は、感覚を発達させることは情操と精神を伸展し昂揚させて実行力への意志を目覚めさせるために重要であって中でも味覚の発達は大事だ、と強調しているわけです。

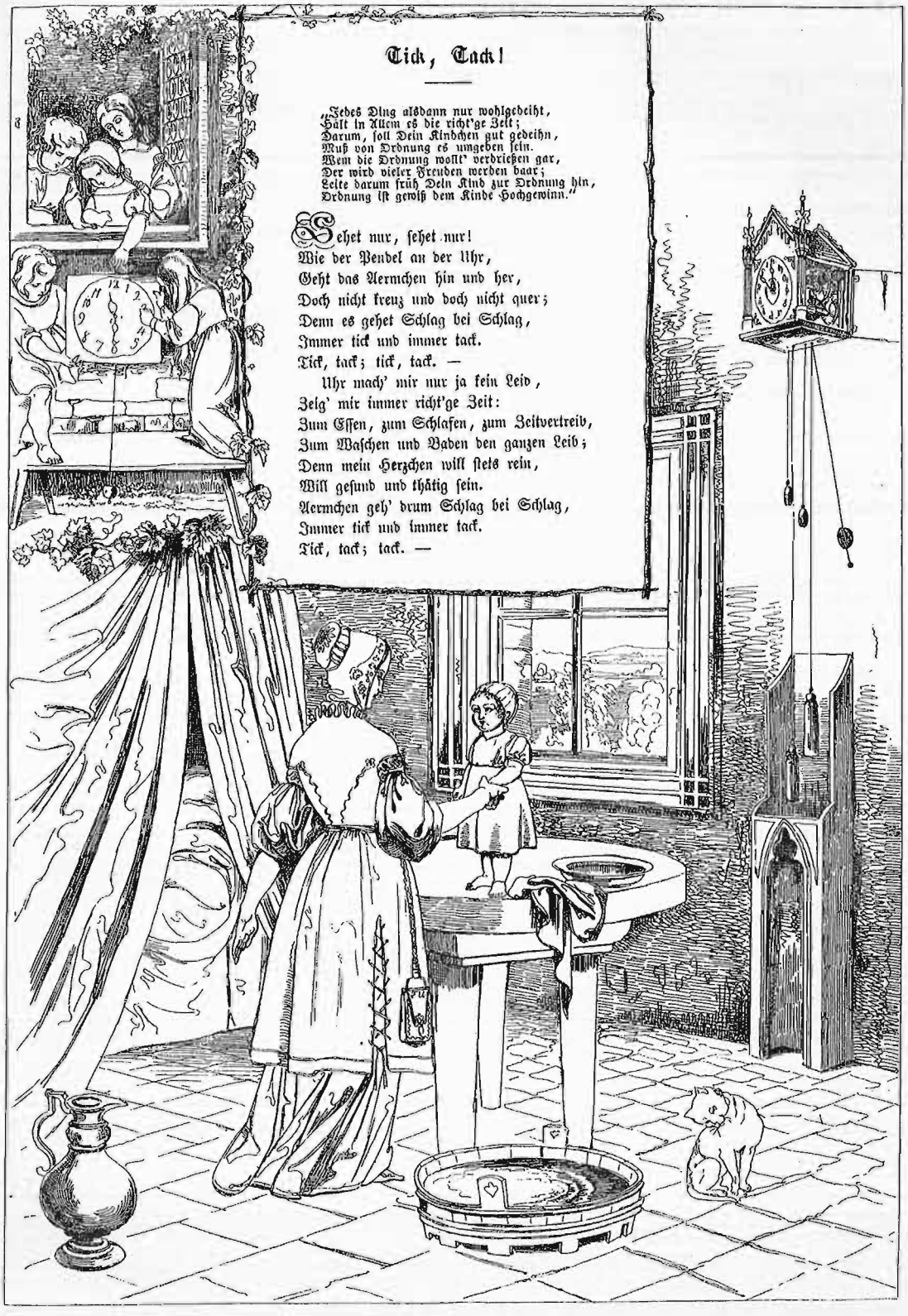
趣味というと日本では、個人的な「好み」という意味で用いられる場合と、趣味がいいというように教養を感じさせる審美眼（しんびがん）といった意味あいで用いられる場合とがありますが、ドイツ語の der Geschmack については後者、すなわち審美的規範性の意味だけに用いられる語であるといいます。

中世の価値体系が崩壊したあとのルネサンスから近世にいたる時期においては、準拠（じゅんきょ）すべき価値の尺度がない以上、「感じる」ことによって価値を直接見分ける以外なかったため、直感的な価値判断はきわめて重要な意味をもっていたといいます。そこからヨーロッパ諸国では17世紀から18世紀にかけて哲学の命題に趣味が取り上げられて、特にカントによって趣味は、美を判断する能力という資格を与えられたといいます[11)]。

フレーベルはここで味覚を感覚器官の作用から味わいへ、さらによい趣味へと精神的作用に転化させています。よい趣味を正しい価値を見抜く能力とし、さらには良識としているのです。この考え方自体、ヨーロッパにおける「趣味」の哲学的論究を反映しています。

彼によれば、自然は人間の感覚器官に訴えてその本質を語っている。感官はそれを感じる。しかし、それを光（正しい価値、良識）へ導くのは精神であるとされます。つまり、人間の感官は不可視的なものを内的に直観したり把握したりする力を有している。だから、人間は人生の初期から精神の道具として感覚を発達させなければならないとされているわけです。

11）佐々木健一「趣味」『日本大百科全書　11』小学館、1986、709頁参照。



Tick, Tack!

„Jedes Ding alsdann nur wohlgedeiht,
Halt in Allem es die richt'ge Zeit;
Darum, soll Dein Kindchen gut gedeihn,
Muß von Ordnung es umgeben sein.
Wem die Ordnung wollt' verdrießen gar,
Der wird vieler Freuden werden baar;
Leite darum früh Dein Kind zur Ordnung hin,
Ordnung ist gewiß dem Kinde Hochgewinn."

Sehet nur, sehet nur!
Wie der Pendel an der Uhr,
Geht das Aermchen hin und her,
Doch nicht kreuz und doch nicht quer;
Denn es gehet Schlag bei Schlag,
Immer tick und immer tack.
Tick, tack; tick, tack. —
Uhr mach' mir nur ja kein Leid,
Zeig' mir immer richt'ge Zeit:
Zum Essen, zum Schlafen, zum Zeitvertreib,
Zum Waschen und Baden den ganzen Leib;
Denn mein Herzchen will stets rein,
Will gesund und thätig sein.
Aermchen geh' drum Schlag bei Schlag,
Immer tick und immer tack.
Tick, tack; tack. —

6. キッチン、カッチン

すべてに正しい時を守れば
何事もよく栄える。
だからお前の子がよく栄えるには
秩序でそれを囲まなくてはならない。
秩序が嫌いな人は、
たくさんの喜びを失うだろう。
だから疾(はや)く子どもを秩序に導け、
秩序は確かに高い獲得だ。

ごらん、見てごらん。
時計の振り子の動くよう、
　横や斜(はす)じゃないけれど
　小さい腕はあちこちと
　一ふり一ふり動きます。
　いつでもキッチン、またカッチン、
　キッチン、カッチン、キッチカッチン。——
　　時計は私に邪魔でない、
　ご飯や、寝んねや、お遊びや、
　お湯に入るや、洗濯に
　正しい時を知らすから。
　私の心は清らかで、
　丈夫ではたらくつもりゆえ。
　だからお腕よ、動きなさい、
　いつでもキッチン、またカッチン、
　キッチン、カッチン、カッチンコ。——

「欄外装飾画の説明」

キッチン・カッチン

腕を運動させ、養成する遊戯

これを実行するのはやさしい。育む母よ！あなたの幼児は、この絵の示すように、テーブルの上に立つか、あるいは、またあなたの膝の上に腰かけているかして、1つの腕は自由で、あなたがそれを振り子のように垂(た)れて動かせるようになっている。この訓練が右とか左とかの一方の腕だけに限られていないことは、自明のことであり、おそらく言うに及ばないであろう。しかし、あなたは、あなたの子どもを全面的に発達させるために、この遊びを脚についても——あるいは右、あるいは左というように、交互に——行うことができる、ということは言った方がよいように思われる。

これらすべては、あなたの子どもを健康に、美しく、優雅に、軽快に発達させるために寄与(きよ)するところ甚大(じんだい)であろう。

思いやりの深い母よ！　私らはなお一緒にこの絵について話しあった方がよいであろうか。けれども、実際、あなたはこれらすべてを私よりもよく知っている。私も実際、あなたの母としての思いやりの深い行為を注視しながら、それを習得したのであった。

親愛なる母よ！　あなたはまったく正しい。すべて時計と称するもの——およそスイス人の言い方は、きわめて多くの他の事物においても非常に表示的であるが、この場合にも、時計に対して“時間”という言い方が用いられている——が子どもたちを非常に引きつけるということは確かにはなはだ注目すべきことである。

であるから、私は、たしかに子どもたちの幸福のために、つぎのような確信を捨てることはできない。すなわち他の色々なことがらにおけるように、ここにも一層高い内的関係——精神に関するある予感と親和の関係——が現われている。たしかに、振り子の振動における運動法則（リズム）の常に同一な表現は、非常に魅惑的(みわくてき)なあるものである。よき教育をもつ母よ。あなたは、あなたの学校時代からなお覚えているであろう、あの振り子の振動の性質、迅速(じんそく)なことが、この地上の重要な事物、場所、姿態(したい)について私らに教えたということを。こうして、今や、この方面からすでに、子どもが時計と振り子の振動とに惹(ひ)かれることには、かなり高い意味の予感が存するかのように見なくてはならない。

しかし、そういう話はやめにしたいと思う。動き、歯車の活動、時計の中の見せかけの生命*)、メカニズム、特に、隠蔽(いんへい)されていること、いわばそれの秘密があなたの子どもをひきつける。これがあなたの意見である。それは時にはそうかもしれない。それは私も認めよう。しかし、全然そうで

あるとは決して言えない。というのは、もしそうだとしたならば、なぜ子どもたちは、私がよく見かけたように、好んで日時計を作ったのであろうか。日時計においては、ほとんど認めることのできない運動、すなわち日陰の移動のそれ以外、何ら運動が示されないのである。

であるから、子どもが日時計をもてあそび又表現したがる根底には、彼の内に深く眠っている時間の重要性についての予感が横たわっているのだという私の意見、信念、あるいは確信——それはどう名づけられてもよろしい——を仮に許してもらいたい。この私の意見は、それ自身、子どもにも、またどんな人にも害にならず、それを適用すれば、子どもにもあらゆる人にも利益を与えるものである。というのは、時間を利用することがすべての生活状態に対していかに重要であるかを、知らない人があるだろうか！

およそ人間が地上に現れた最も最初から、彼にとって、正確な時間を保ち、捕えること以上に重要なものを私はほとんど知らない。子どもの生活はその初めの生活期間において、非常にしばしばこれに左右されるのではなかろうか。——であるから、時計に対する子どもの嗜好（しこう）・衝動（しょうどう）、いや、興味——といってもよいであろう——を、彼自身のために利用して、彼が時間を正当に顧慮（こりょ）し、正しく捕え、もっともよく使用するように教育することが、もっとも本質的な問題なのである。

注意深い母よ！　私らはただちに私らの小さい関節の遊びを利用して、私らの愛する子どもをして時間に対する注意を発達させ、こうして、他日（たじつ）、彼が“この絵を見せて下さい”というときに、彼があなたを理解するようにさせたいと思う。このとき、あなたは答える。“ごらん、この猫のしていることを。

猫は顔を洗っている。

人がそれを見てうれしがるように。

きっと、もうすぐ親しいお客さまたちの訪問の時間だということを知っているのですよ。”

母は彼にむかって言う。

“かわいい子ども、お前もこっちへ来なさい。顔をきれいに光らせてあげましょう。もうじき2、3人仲のいいお客さまがお前のところに来ますからね。お父さんのやさしい眼は非常に明るいでしょう。だから、お前も明るい眼をしてお父さんに会わなけりゃいけません。そうすれば、美しい花やきれいな鳩もやって来るでしょう。”

こんな可愛いお客さまが子どものまわりに集まろうとしている。だから、子どもも隅から隅まできれいになっていなければならない。

しかし、愛らしい子どもは、つねに訪問を受ける。あるいは、太陽の明るい光線、

あるいは、輝く星と冴えた月、すべてが幼児に逢い、彼を愛撫しようとする。

彼らはみんな子どものところに来たがる。

なぜなら、かれらは彼の明るいことを聞いたから。

もしそうでなければ、明るいかれらは、きっと子どもを避けただろう。

そして、お前は、自分にも、かれらにも、苦しみを与えただろう。

だから、わたしの子ども、お前がどこにいても、決して純潔さを失わないようにするがよい。

ここには、ちょうど５人の子どもが時計遊びをしている。この５人の子どもはたしかに、すべてのことをちょうど適当な時間に行なえるように、時間をまったく正確に覚えこみたがっている５本の指である。“さあ、おいで、私の子どもの５本の指よ、そして、５人の子どもについて何かをお習いなさい。”

*）元訳は「時計の中の運動、機関、表面的な生活」。しかし、原文では、Die Bewegung, das Raderwerk, das sheinbare Leben in der Uhr と、時計の動きの説明をしているので、訳語を変えた。

筆者による補足

1)「○○の時間」ということ
2) 子どもの予感

1)「○○の時間」ということ

主人公の子どものために親が歌って聞かせる歌詞にも、また、絵本として見る子どもに対しても「○○の時間」「△△の時間」といった具合に「正確な時間」で、日常生活が組まれていることが語られます。

今日なお、乳幼児期の子どものために大人が気をつけることの１つとして次のことが言われます。すなわち、子どもは日常生活の中で、ほぼ一定の場所や時間にほぼ同一なことが行なわれる日常性を自分の内に獲得して安定感を得ていくので、そういう慣れができるまでは、例えば食事、睡眠等の時間、場所、道具等をむやみに変えないこと。確かに、大人の私たちは自分のなじんでいる部屋、起床の時間など慣れてしまっていると気づきもしませんが、乳幼児期はそれらを獲得し、それによって安心感、安定感を得て自発的に自由に活動をすることができるようになるといわれます[12]。　だから、逆にこのような基本的な部分における安定感を持てない場合におこす不安は、大人が想像するよりもずっと強いと思われます。

このような、子どもが安心して育つ基本的な部分を、フレーベルは子どもの乳児期から、「○○の時間」「△△の時間」といった表現で、生活を形成していくことになじませていると

12) M. モンテッソーリ著鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、1968、64 頁－ 76 頁参照。

感じられます。しかし、正確な時間を重視するその根拠について、フレーベルの場合、生命現象としての人間の精神の成長を彼の世界観から捉えており、時間性をその一環として重要不可欠だと位置づけているところから生じていると考えられることについては、第Ⅱ部第6章「子どもの精神」の中の（6）「キッチン　カッチン」の項に述べているので参照して下さい。さらに、そのような「○○の時間」の一環に、子どもをお客が訪問する時間がありました。父親だけではなく太陽光線という注目すべきそのお客についても第Ⅱ部第5章「子どもの他者への人格的関係」に述べていますので参照して下さい。

2）子どもの予感

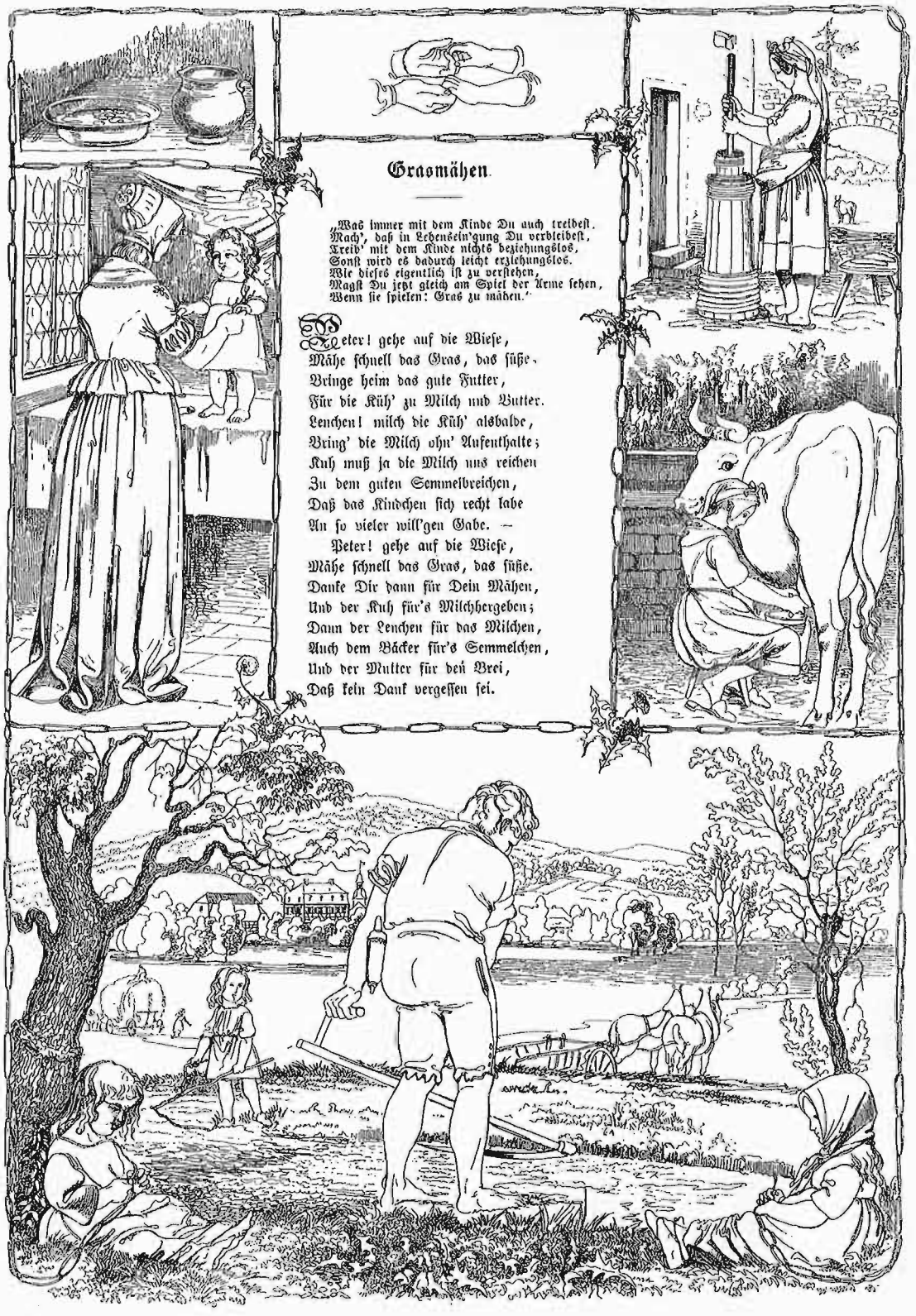
予感とは、一般的には、後に正確に明らかになることがらがその前兆のようにして明らかではないが何かが感じられるという場合に用いられ、通常、自己の内に自ずと生じるものであって他人から気づかせられるようなことではないと思われています。しかし、フレーベルがこの歌でも他の歌でもふれて非常に大切にしている子どもの予感は、それとは少し異なっており、次のような内容です。

フレーベルによれば、幼児期における事物の識別や認識は、やがて少年期以降成人後に至るまで形成されていく概念化や科学的理解などの土台になっていきます。幼児期の事物認識には、例えば氷のかけらに太陽光線の虹の分光色を見出しても、ありが巣穴に出入りしているのを見つめている時にも、透明な浅瀬に足を入れている時にも、そこには、なぜかわからないが引き込まれるときめき、感に堪えない不思議、何かわからないが感じる期待感等といった心情的な要素が大きく含まれています。それらは、後に、合理的・科学的に理解できる喜びへとつながれて精神を明るくしていく土台になりますが、それを幼児期にはときめき、不思議、何とはわからない期待などの心情、身体的動きと一体化して全身全霊で受けとめています。フレーベルの表現でいうなら対象と自分とが渾然と溶け合った「生命の合一」を経験しています。

しかも、その経験の中には将来の合理的・科学的理解とは別に、心情的に私たちの生きているという感覚を豊かに彩っていく、いわば生きる意味につながって魂を明るくしていくというより他ないようなものもあります。フレーベルが「子どもに見入る母への一瞥」において詳しく語っている彼自身の幼児期のハシバミの花における予感は、後者の、つまり年齢を重ねるに従ってより広く、より深く生きる意味につながっていった、彼にとって大事な記憶の叙述です。そして、自分自身の存在の意味という後者の理解の最たるものが、フレーベルにおいては、神に創られたこの世界、「全体」「一」などという理解と不可分の感覚になります。

フレーベルのいう子どもの予感は、ごく普通の大人にとって、それを大事と教えられない限り気づき難いものです。まして幼児期の子どもは自分の予感などと意識することもありません。そこで、フレーベルは、子どもに愛情をもって接しているからこそ子どもの予感に気

づくことのできる大人に対して、子どもの予感というものを説明するだけではなく、しばしば、「子どもに予感させなさい」と語りかけます。つまり、例えば上に挙げたような幼児の心からの不思議、ときめき、引き込まれる感じ等に親や保育者は共感するだけではなく、むしろ意図的に子どもにそれらを味わわせるようにとフレーベルは求めているのです。それは、子どもの予感は、子どもが対象を自分の内に取り込み、自分でも気づかないうちに世界を信頼できる親しみある世界として形成していくところに大きく働くからでしょう。



Grasmähen.

„Was immer mit dem Kinde Du auch treibest,
Mach', daß in Lebensein'gung Du verbleibest,
Treib' mit dem Kinde nichts beziehungslos,
Sonst wird es dadurch leicht erziehungslos.
Wie dieses eigentlich ist zu verstehen,
Magst Du jetzt gleich am Spiel der Arme sehen,
Wenn sie spielen: Gras zu mähen."

Peter! gehe auf die Wiese,
Mähe schnell das Gras, das süße,
Bringe heim das gute Futter,
Für die Küh' zu Milch und Butter.
Lenchen! milch die Küh' alsbalde,
Bring' die Milch ohn' Aufenthalte;
Kuh muß ja die Milch uns reichen
Zu dem guten Semmelbreichen,
Daß das Kindchen sich recht labe
An so vieler will'gen Gabe. —
Peter! gehe auf die Wiese,
Mähe schnell das Gras, das süße.
Danke Dir dann für Dein Mähen,
Und der Kuh für's Milchhergeben;
Dann der Lenchen für das Milchen,
Auch dem Bäcker für's Semmelchen,
Und der Mutter für den Brei,
Daß kein Dank vergessen sei.

7.

草刈り

何を子どもとやっても
生活の結合を失うな、
関係を失ったことを子どもとするな。
それでないと無躾(ぶしつけ)になる。
それが本来どういうことなのか、
子どもが草刈りを遊ぶときの
腕の遊戯で直ぐわかる。

牧(まき)場(ば)へお行き、太郎さん、
甘い草をば早く刈り、
乳やバタアの牛にやる
よい餌(え)を家へ持っといで、
乳をお搾(しぼ)り、お花さん、
すぐに乳をば持っといで。
パンのおかゆをこしらえる
乳を牝牛(めうし)がくれましょう。
こんなに多い賜物(たまもの)で、
坊やが大きくなるように。——
　牧場へお行き、太郎さん、
甘い草をば早く刈れ。
ではありがとう、草刈りを、
牝牛のお乳もありがとう、
それからお花さんの乳搾り、
パン屋さんのパンを作るのも
母ちゃんのおかゆもありがとう。
みんなお礼を忘れまい。

「欄外装飾画の説明」

草刈り

腕の遊び

あなたの子どもの両方の手はじっとしたままでいる。前腕を水平にして、少し前方へ伸ばし、指を曲げ、甲を上方に向けて、あなたの手に握られている。あなたの手もやはり同じような形をし、曲げられているが、しかし、その甲は下方へ向けられ、そして両腕は平行している。こうして、そこには、草刈りに似た運動が示される。この運動は、特に、子どもの上膊(じょうはく)関節と真直(まっす)ぐの姿勢を養成するのである。

注意深い母よ！　子どもたちの幸福と心の安寧(あんねい)にとって、特に、彼らの心情の育成と彼らの情操の保育にとって、彼らにもっとも有害なことは、ややもすれば外的に非常に分離され区別されて存在する事物を、内的にも、全体の人生の結合から離れ離れになっている状態において、観察することである。慎重な母よ、あなたが早くからこういうことのないようにあなたの子どもを守ることを祈る！　この遊戯のように、このことが子どもの遊びによって教えこまれるといいのであるが。“ママ、お腹がすきました！”“ねえやの所へ行って、パンをおもらいなさい。”あるいは、“さあ、1銭あげますから、パンを買ってらっしゃい。”私らは多分、実生活においてはしばしば子どもに向かって、こういう風(ふう)に言わなければならないことがある。しかし、少なくも私らはいつでもそうしてはいけない。私らは早くから、そしてできるだけしばしば彼に“さあ、向こうへ行って、誰それにパンを、または何かほかのものをもらっておいで”と簡単に言ってしまわずに、ひとわたり眼を通し、かつ充たすべきいろいろな条件や事情をはっきりうなずかせなければならない。

田舎または庭園の生活、職業生活、実業生活に取材した美しい絵の聡明(そうめい)な選択・序列・編纂(へんさん)。そして現実生活を簡単に描写したごく簡単な物語をこれに付け加えるならば、こういう結果が得られる。それは、母よ、あなたも既にたしかに試みた。そして私らは――もしあなたが後に私にそれを許すならば――選び出した絵を吟味(ぎんみ)しながら、一緒にこれを実現したいと思う。

いまやあなたは、絵によって助けられた歌によって導かれながら、絵について教訓を求めているあなたの子ども――を容易につぎのように導くことができるであろう。すなわち、子どもが彼のパンのおかゆのために、ただ彼の母、太郎さん、牛、お花さん、パン屋に向かってだけでなく、さらに、全く何よりも先に生命の賦与者(ふよしゃ)と維持者に、したがってすべての存在物の父に感謝しなければならないように。――この父の指定によって、大地は――露・雨・日光・夜・冬・

夏によって影響されながら――、家畜の飼料になるように、そしてしばしば家畜の食料を通じて、始めて人間のために、草とか野菜とかを生ずるのである。

あなたの子どもはこの場合にたしかにあなたを理解するだろう。あなたが、彼自身に、たとえこの絵の少年のように真似によってでも、大人が生活維持のために行なうことがらに参加させればさせるほど、彼はあなたをますます理解するのである。特に、他日あなたが彼に彼自身の小さい庭を耕させ、得られた果実をみずから収穫し、こうして、太陽・露・雨の影響、神によって大地と自然の中に置かれた永遠の法則、それらを自ら感じさせるとき、そうである。

下の方の両隅に坐っている子どもたちは、乳液を出す鎖草で鎖を作ろうとして、今までなかなか成功しない。たとえあなたの子どもが今はそれと同じように、生活の鎖を完全に結ぶことができないとしても、彼は心中けっして他日の成功を疑うことはないであろう。ちょうど、勤勉な男の子や考え深い少女が、“着実に進んで行けば、いつかは彼らの生活の鎖が美しく結ばれて、彼らを悦ばす”日の来ることを疑わないように。

しかし、注意するがよい、と少年が坐っている左手の木は、それ自身の姿によって、彼ならびにすべての教育者にむかって言う。高貴ならぬもの、卑しいもの、偽のもの、妄想、それらを元来善良な幹に接木することのないように注意するがよい。でなければ、そこからは矮小した頑なな木が生じ、それはただ渋いまずい果実をしか生じないであろう。

注意するがよい。少女が坐っている右手の木は、それ自身の姿によって、彼女とすべての教育者にむかって言う。尖頭と頂点、すなわち生活衝動を傷つけ、あるいはさらに、無知または無思慮のために、あなたの子どもたちの生命の木の頂を壊さないように注意しなければならない。もしそうでなければ、あなたの報酬は、藪、材木、葉だけであって、花も咲かなければ、果実はなおさら生じないであろう。

母よ、今こそ、なぜこの２人の子どもが、このように物思いにふけって木によりかかって坐っているのか私には明らかになった。どうかこれらの木が彼らに吐露する重要な真理が、彼らの心の内部で、自己経験として反響しないようにしたいものだ！
母よ！　母よ！　あなたがこういうことをあなたの子どもたちのために決して心配する必要のないことを祈る！

力づよく草を刈るよろこばしげな少年よ、快活に乾草の車について行く元気な少女よ、お前たちはきっとそんなことはない。

筆者による補足

労働・仕事・職業

この歌から、子どもは大人の家庭内労働だけではなく、職業労働（生業、実業の仕事）の生活を、歌と手遊びと会話によって**意識**化するようにされています。

私たちが思うよりもずっと早くから、フレーベルは子どもに大人の職業労働に気づかせ、真似させています。その際、お父さんの労働、子どものよく知っている人の労働など、子どもがよく知っていて親愛の情を抱いている人の労働から眼を向けさせています。そのような人が一所懸命に働いている姿を歌や会話に取り込んでいくことで労働、仕事、職業といったものを誇らしいもの、自分も参加したいものとして子どもが吸い込んでいくようにフレーベルは図っています。そこには、「私たちが眠っている間も、皆を番する方が、今みんなを守っている」(22)「無邪気な姉妹」という、人間の労働を、「眠ることなく働かれる神に傲(なら)うわざ」と位置づける彼の労働理解が認められます。ドイツ語の der Beruf（神の招聘(しょうへい)、召命、転じて職業）に通じる理解です。

労働の真似遊びの最初に「草刈り」が選ばれていることに関わり、フレーベルは別の文書で学校教育が段階順序をふむ必要があることを述べている中で、**産**業発展について「農耕がより完全に発展すればするほど産業はますます形成され、産業が完全に栄えるほどますます家内工業および商業は改善される。農耕、産業、商業が栄えれば栄えるほど、ますます芸術や学問は高度に活気づくだろう」[13] と語っています。つまり産業発展を農耕――産業（含家内工業、商業）――芸術・学問と段階づけて、農耕を最初・根本に置いています。だから、子どもが大人の働く姿に気づいて注目するようになると、意図的にすぐに農耕に話を持って行っていると思われます。もちろん、日常生活によく見られる光景でもあったのでしょうが。

そして、この観点からすれば、後の（33）「炭焼き小舎」－（41）「建具屋」に職業労働の一連の遊び、(47)「商人と少女」(48)「商人と少年」に商業の初出、(50)「小さな画家」に描画、という配置になっていることもうなずかれます。

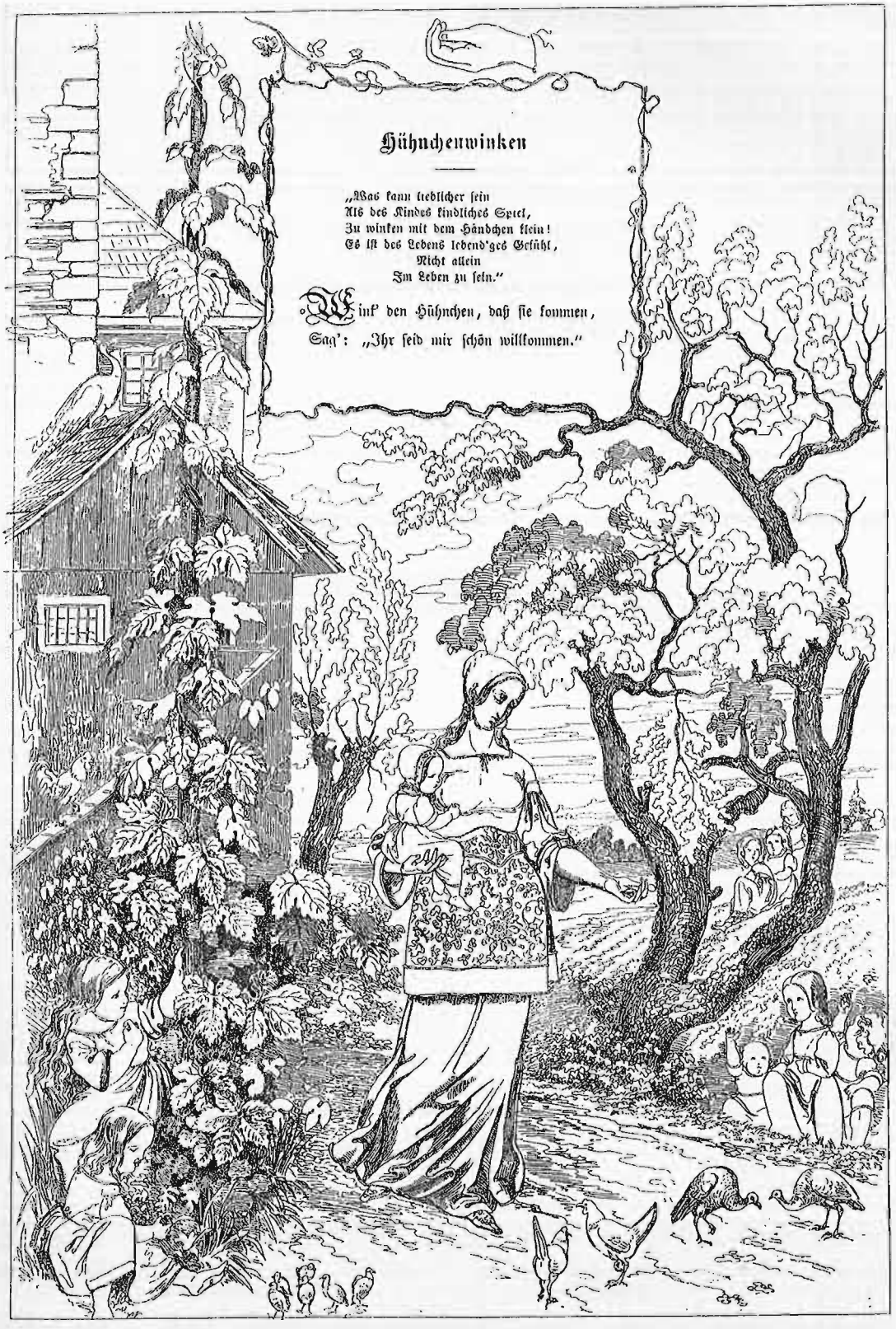
職業・仕事・労働に関わるフレーベルのこのような遊びを、後に米国の S. ブローは「個人を社会全体に結びつけ、紐帯(ちゅうたい)に関する予感を早め、また各々の対象や出来事の、親からの、また先祖代々の特徴をほのめかす」[14] と述べています。M. ウェーバーが指摘したプロテスタンティズム労働観[15] に通じる指摘でしょう。

13）米山弘訳「**ドイツ教育全般について**、および特にカイルハウ学園の一般ドイツということについて」、小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル**全集**』第1巻、玉川大学出版部、1977、460頁－462頁参照。

14）S.Blow, Symbolic Education, Edited by W. Harris,International Education Series Vol.XXVI, D.Appleton & Co., 1906, p.102.

15）M. ウェーバー著梶山力、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（上）、岩波文庫、1955。

それはそれとして、私たちはここで、まだままごと遊びによって大人の労働への憧れと親愛とを表現するにも至らない時期の幼い子どもに、親を含めて周囲の大人の労働に気づかせてお礼をいうことで労働や仕事への親近感をも育てているフレーベルのあり方を、人間の成熟への慎重な最初の第１歩の踏み出しと見たいと思います。


Hühnchenwinken
„Was kann lieblicher sein
Als des Kindes kindliches Spiel,
Zu winken mit dem Händchen klein!
Es ist des Lebens lebend'ges Gefühl,
Nicht allein
Im Leben zu sein."
Winkt' den Hühnchen, daß sie kommen,
Sag': „Ihr seid mir schön willkommen."

8.

雛をよぶ

小さな手でさしまねく、
小児の小児らしい遊びより、
愛らしいものがあろうか。
　人生にひとりで
　いないことこそ、
人生の生き生きした感じだ。

鶏をおよび、寄って来るように、
お言い“ようこそおいでだ”と。

「欄外装飾画の説明」

雛を呼ぶ

母のさしまねく手。すべての指を愛らしく曲げてさしまねく幼児の手。それらは、この子どもの遊びを外的に理解するためには、決してそれ以上の追加を必要としない。それによって、指の運動が強められ、訓練されることは、自ら明らかなことである。

しかし、この絵の母はたしかに私らがたった今この前の絵の機会に話しあったことを聞いたのである。楽しげな会話をしているひな鳥から眼をそらさずにいる、この健康な力づよい幼児をゆっくり見つめるがよい。母はたしかに、子どもが彼自身の清新な、生き生きした、内的生活を外界の生活の鏡の中に真に明らかに眺め、真に力づよく自己の内に感ずるようにとの目的をもって、彼を戸外に連れ出したのである。子どもたちのいくつかの群れ——その一部はおそらく彼女の子どもであろう——が、この母に従って戸外へやって来た。一体、こういう子どもたちの保育が示されるところへ、誰がよろこんで付いていかないだろうか。そして、特に、それがこんな子どもであってみれば、なおさらではないか！——しかし、どうかこの子どもたちを見つめるがよい。健康、快活、聡明、それらが彼ら一同の顔と運動の中に横たわっている。右の方の3人の子どもたちを見てもらいたい。真ん中の子どもはひざまずいている。

新鮮な自然生活は、あたかも磁石のように、何と牽引的（けんいんてき）に作用していることであろう。2人の少女の後にいるたくましい男の子は、自然生活から非常に強い印象を受けたので、この生活をこの2人と共にするだけでは、決して満足できないのである。いや！　彼は後を振り向いて、非常にうれしそうに木の間からこちらの方を眺めている別の3人の子どもたちに、こちらへ来るように合図をしている。けれども、彼らはそれに応じる気がないように見える。彼らの前に開けわたった野を見わたすことが、あまり強く彼らをひきつけているのである。そして、また左の方には、鶏の家族の生活表現を1つも見のがすまいとして、子どもがうずくまっている。一方、女の子はもう目覚め始めた保育の天性から、力づよく立ち上がって、牝鶏や雄鶏が彼らの雛を見失わないように、こちらへ来いと招いている。

こうして、どの子どもも、自然の鏡の中に彼自身の内的生活を見、またこの鏡をかように眺めることによって、その生活を強めていく。それは、ちょうど、子どもが母の眼の鏡の中に彼の生活を認め、このように眺めることによって強くなっていくのにひとしい。そしてたしかに！　すべての子どもたちは、少女のかたわらに、非常に力強く新鮮に、上の方まで蔦（つた）をからませているホップのように、快活に生い育つであろう。そして、彼らは老年になってもなお、いま子どもたちがその蔭の下で自然の生活

をよろこんでいる木のように、強壮でいる
だろう。

筆者による補足

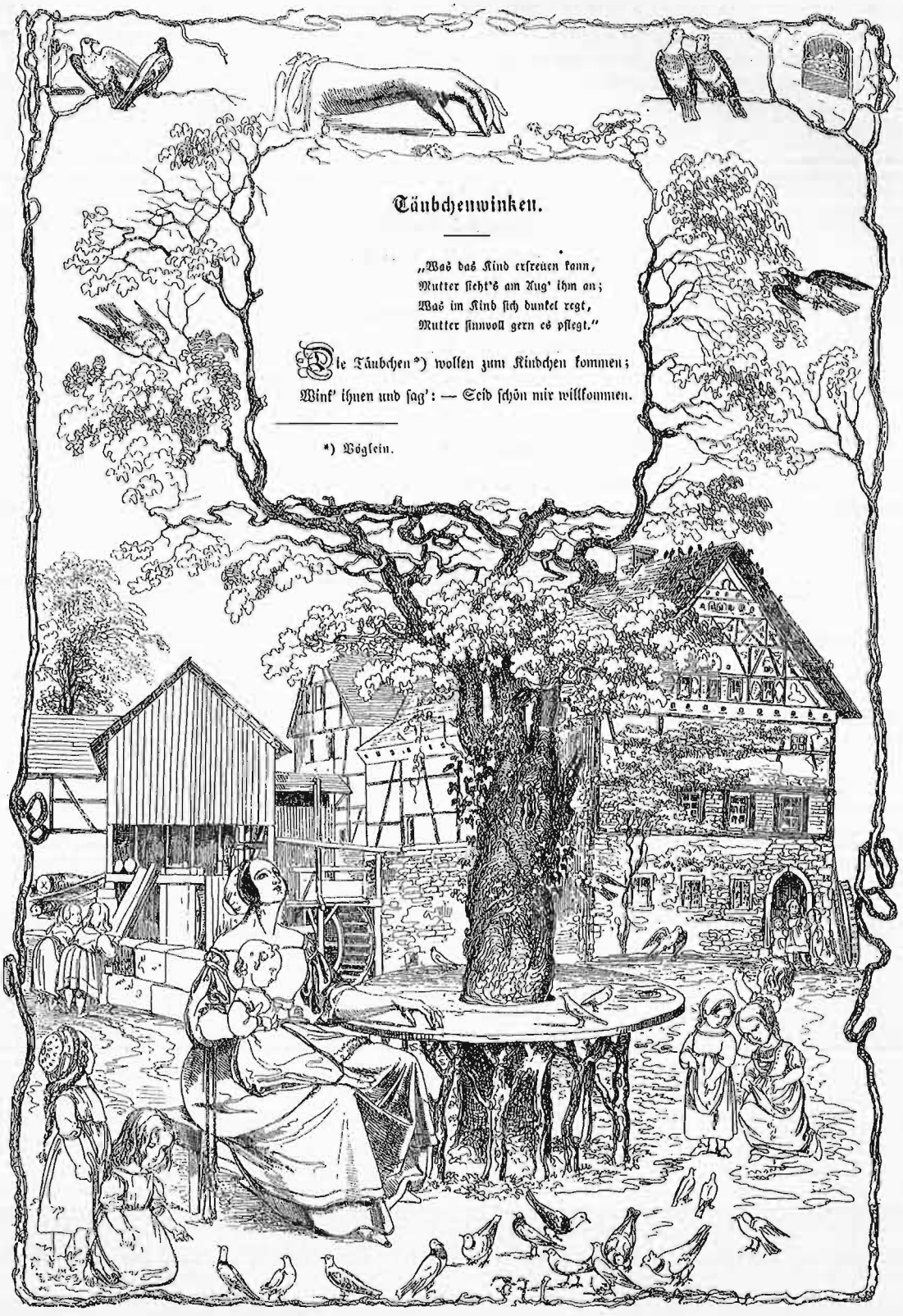
人生に１人でいないことこそ、人生の生き生きした感じだ（題詞から）

家の戸口から１歩出ただけの所で生じる何気ない生活の１コマの持つ意味については、第Ⅱ部第６章第２節の（8）「雛を呼ぶ」を参照して下さい。

フレーベルは、子どもは新奇なものではなく、古いものやよく知っているものの中に新しいものを求める、ということを言っています[16]。ここで彼が私たちに求めている子どもに対する語りかけの内容は、正にそういう類（たぐい）のことがらであって、大人としてはよく見慣れて新奇に思わない事象が子どもにとってはそうではないこと、むしろ大人が見過ごしやすいそれらを、子どもの様子から気づいて汲み取って、子どもに語ることを求めているわけです。

シュプランガーは、フレーベルの思想を語る中で子どもの遊びについて、「幼い子にとっては本来、自分をとりまくものに感情を移入し、その中に自分と似通った心理形式を予感するということは我を忘れさせる遊びです」と述べた上で、遊びにおける主観と客観の同一化、フレーベルのいう「生命の合一」によって愛の萌芽へと導かれることを語っています[17]。

16）荘司雅子訳「子どもの第四遊具」『フレーベル全集』第４巻、265頁、266頁。
17）E. シュプランガー著小笠原道雄、鳥光美緒子訳『フレーベルの思想界より』玉川大学出版部、1983、40頁。


Täubchenwinken.
„Was das Kind erfreuen kann,
Mutter sieht's am Aug' ihm an;
Was im Kind sich dunkel regt,
Mutter sinnvoll gern es pflegt."
Die Täubchen*) wollen zum Kindchen kommen;
Wink' ihnen und sag': — Seid schön mir willkommen.
*) Vöglein.

9.

鳩をよぶ

子どもを何が喜ばすか、
母は子の眼で見わける。
子どもの心にぼんやり動くものを
母は意味をこめて養う。

鳩は*) 子どもに来たいのだ。
よびよせてお言い。ようこそ来たと。

*）小鳥は

「欄外装飾画の説明」

鳩を呼ぶ

子どもがしばしば戸外（こがい）で母の腕または膝に抱かれて見たものを、母は室内でテーブルの前に腰かけているときにも、子どもをよろこばすために、喜んでやってみるものである。この場合に、かたかた音をたてながら子どもの方へ近づいて来る母の指は、戸外で小刻みにこちらへ歩みよる小鳩、あるいは、鳥である。子どもの生活本能が子どもを駆（か）って、母の活動を模倣させるならば、指の前進に際して指関節の訓練が生ずる。これが、この小さい遊びの外面についての説明である。

生活は生活を牽引（けんいん）する。この前の絵において、自然生活が子どもたちの生活をひきつけたように、ここでは、快活な専心（せんしん）な子どもの生活が自然生活、特に、小鳩や鳥の生活を、ひきつけるのである。実際、小鳩がみんな何と親しそうに子どもたちの所へ来ていることだろう。ちょうど、彼らは互いに彼らの言葉を理解しあっているかのように見える。四方八方から、小鳩がひらひらと飛んで来る。彼らには子どもの言葉が分からないだけに、それだけ一層彼らはたがいに理解しあっているかのように見える。

そして、母よ、あなたがあなたの子どもたちと一緒に生活するときにも、しばしばそうではなかろうか。往々あなたの子どもたちは、あなたの言葉の言うところや意味がはっきり分かっているいまよりも、むしろまだあなたの言葉を解さなかった頃の方が、もっとよくそれに従いはしなかっただろうか。――

これは、一体、どういうことであろう。――なぜであろう。――それについては、動物が我々に教訓を与えねばならないのであろうか。――

“ことばと事物、事物とことば、行為とことば、ことばと行為、それは、彼らにとって、彼らの言語において、常に1つの統一したものである。”

筆者による補足

1）子ども自身が歌う歌の始まり
2）手あそび･指あそびの意義

1）子ども自身が歌う歌の始まり

お気づきのように、前の（8）「雛を呼ぶ」から歌詞が非常に短くなっています。つまり、初めて子ども自身が歌う歌になったと感じられます。これは最初に作曲したR. コール（Robert

Kohl、当時、カイルハウ学園の音楽教師）の作曲ではもっと明らかです。つまり、歌詞だけなら（3）「塔の上の鶏」も短いのですが、彼の曲では音域、メロディー、リズム等に幼児には難しいと思われるところがありました。つまり母親が主人公の子どもに向かって歌いかけて遊ぶ歌でした。しかし、(8)「雛を呼ぶ」(9)「鳩を呼ぶ」になると、音域、メロディー、リズム、歌詞のわかりやすさ、短さ等、子どもにも難しくないだろうと感じられます[18]。

だから、この歌の頃には既に子どもは、歌う母親の口を見ながら声を出して真似て、歌の端々の真似やすいところから聞き取って歌い始めていると考えられます。そのようにして歌い始め、手も歌に合わせて動かす、しかもその際、歌詞の内容を自分なりに理解してそれに合わせた動作をするという複雑な活動をし始めているわけです。

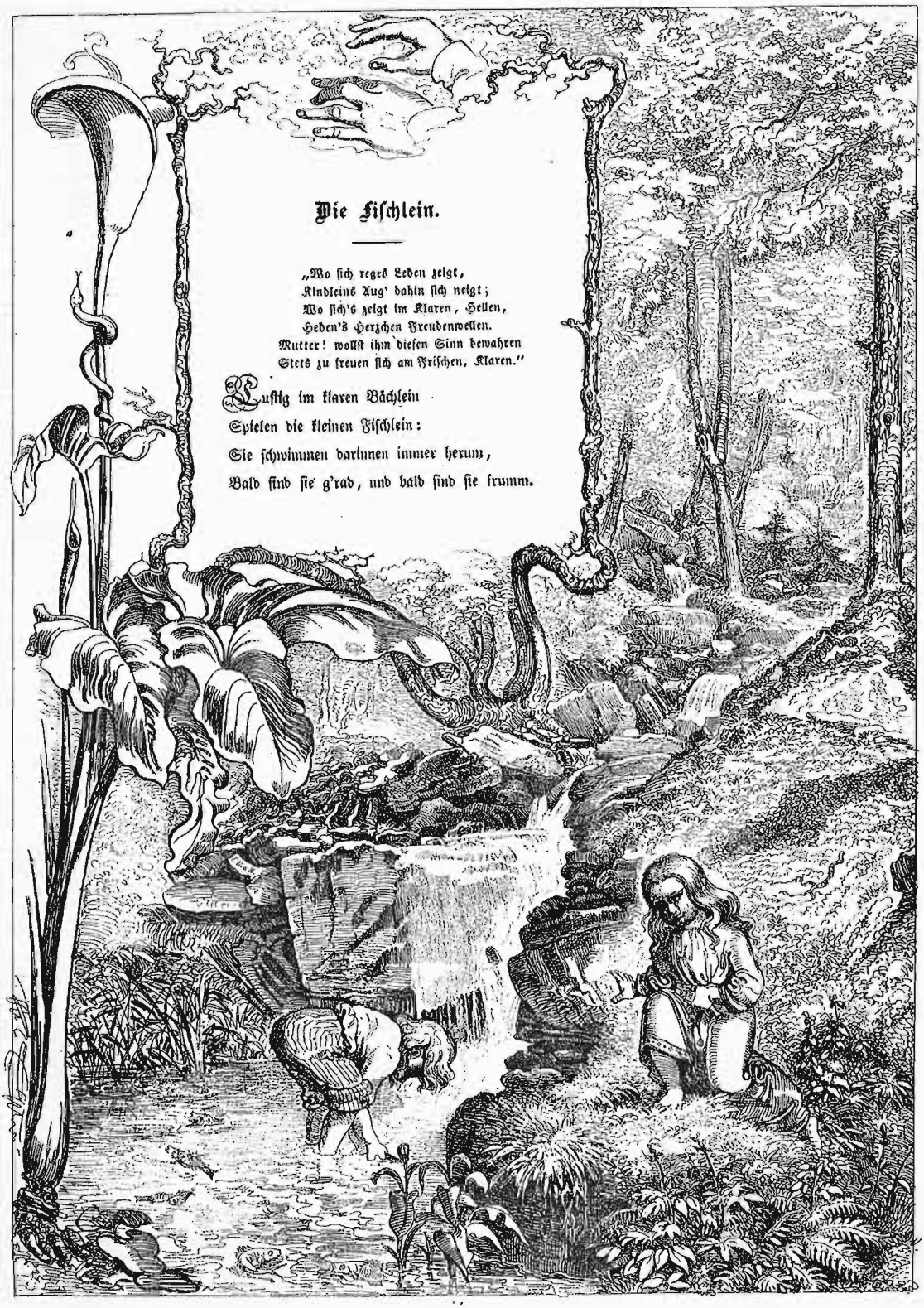
2）手あそび・指あそびの意義

フレーベルは第三恩物の解説の中で「子どもの内に育まれた活動衝動の結果は、認識や真理や思考の形式であるか、あるいは感情と美と心情のであるか、あるいは使用と生活の形式であるかだ」[19]と述べていますが、これらの諸形式が渾然一体となり、しかも恩物以前から手軽く楽しい活動の１つが手あそび・指遊びです。だからこそフレーベルが数々の手遊びを創作したと考えられます。

自分の分かる言葉を連ねて１つのまとまった意味のわかる歌を歌い、それに合わせた動作をして遊ぶのが幼い子どもにとってどれだけ大きな喜びになるかということは、フレーベルの創出した手遊び、指遊びというものが、今日、保育においてどれだけ普及しているかを見れば明らかです。

18）熊谷周子編著『フリードリッヒ・フレーベル著母の歌と愛撫の歌　フリードリッヒ・ウンゲル絵　ロバート・コール作曲』ドレミ楽譜出版社、1991、20頁、34頁、36頁。なお、この本の原本については編著者が冒頭の「母の歌と愛撫の歌」発刊に当って」に述べている。

19）荘司雅子・藤井敏彦訳「第三恩物」『フレーベル全集』第４巻、玉川大学出版部、1981、479頁－480頁。


Die Fischlein.
„Wo sich reges Leben zeigt,
Kindleins Aug' dahin sich neigt;
Wo sich's zeigt im Klaren, Hellen,
Heben's Herzchen Freudenwellen.
Mutter! wollst ihm diesen Sinn bewahren
Stets zu freuen sich am Frischen, Klaren."
Lustig im klaren Bächlein
Spielen die kleinen Fischlein:
Sie schwimmen darinnen immer herum,
Bald sind sie g'rad, und bald sind sie krumm.

10.

小 魚

活発な生活が動く方へ、
子どもの眼は傾いてゆく。
澄んだもの明らかなものにそれが現れると
心の喜びの波が立つ。
母よ、この心を守れ、
常に新鮮なもの明らかなものを喜ぶように。

澄んだ小川で楽しそうに
小さい魚が遊んでる。
その中をいつも泳ぎ廻る。
真直ぐになったり、曲ったり。

「欄外装飾画の説明」

小 魚 *1)

幼児は、母の左の腕にやさしく抱かれながら、彼女の膝の上に腰かけるか、あるいは彼女の前のテーブルの上に坐っているようにする。母の両手は水平の位置に置かれ、いくらか平行し、彼女から外方へ出されている。指は、たがいに無関係に、伸びたり曲がったりして、水泳を模した運動をする。これで、この小さい遊びの外面が明らかになったのである。

小鳥と小魚、小魚と小鳥、それらは、いつも同じように子どもの心を悦ばすものである。なぜだろうか。それらは両方とも全く独立に、少なくも、全く妨げられずに自由に、それらを取り巻くものの中で動いているように見える。そして、このことこそ、子どもに対して名状しがたい価値と魅力を持っているのである。明快、自由、純潔、妨げられることのない運動、これらのものこそ、子どもがその中にあって非常にこころよく感じ、たくましく力づよくなり、よろこばしく形づくられてゆく生活意欲 *2) の根底にほかならない。しかも、小鳥をつかまえ、小魚を捕らえることほど子どもが喜んですることはない。これは矛盾ではないだろうか。――母よ！　けれども、私にはそうは考えられない。あなたの子どもは、小鳥においてはその楽しげな飛翔を、小魚においてはその愉快な泳ぎを、こうして両方の自由な晴れやかな運動と自己決定を、純潔なもの、明らかなものの中に獲得したがっているのである。まことに、母よ、これこそ、あなたの子どもをこれほど小魚や小鳥を捕らえたがらせるものなのである。けれども、外部から捕えるだけでは、それが何度成功したとしても、何の役にも立たぬのである。自由な存在は、内部から捕えられねばならない。そして、実に内部からは、明快なものと純潔なものだけが獲得されねばならない。その中で動きまわることこそ、非常に子どもを喜ばすのである。母よ、たとえ最初はもっとも微弱な予感においてだけでも、あなたの子どもにこれを理解させるように努めるがよい。あなたは、それによって、あなたの子どもたちの内的平和と生活の真の悦びを永久に根底づけるのである。母よ、あなたの子どもが早くから、純潔なもの、明快なもの、喜ばしげな活動、たのしい運動を喜ぶのをこの目的のために利用するがよい。

“兄さん、どうか私にも1匹、魚をつかまえて下さい。そこにいたり、見えなくなったり、曲がったり、真直ぐになったりして、あんなに愉快そうに小川に泳いでいて、どんなふうに動いても、ほんとに可愛らしいんです。私もこんなに泳いだり、ぐるぐる廻ったり、曲がったり反ったり、真直ぐに伸びたり、早く逃げたり、たやすく隠れたりすることができたら、ほんとに、兄さん、私は兄さんをからかってあげるのに。兄さん、1匹、捕って下さい！”――“さあ、

1匹あげるから、しっかり捕まえて、逃がさないようにしなさい。”――

“でも、兄さん、もうちっとも動かないわ。真直ぐに伸びたっきり。けれどまだちゃんと生きていてまだぴくぴくやっています。草の上に置いてみましょう。きっとまた愉快に動きますよ。ここでも伸びたっきりだわ。じゃ何処なら楽しげに動くのでしょう。”

それでは、妹よ、お前は知らないのか。
ただ自分の世界の水の中だけが
小さい魚には気もちがよいのだ。
適当な場所にいなければ
嬉々として泳ぎつづけることはできない。
じぶんの力を正しく使うこと、
それこそ、彼の生活をたのしくさせるものだ。
そして、気もちのよい時だけ、
曲がったり、まっすぐになったりして見せてくれるのだ。

曲がったり、まっすぐになったりする。母よ！この区別はあなたが非常に愛しているあなたの幼児の全生涯にとって極めて重要なことなのである。

“これは、まっすぐな心をもつ人だ。”“まっすぐな行い。”“まっすぐな性質。”

“彼は、まっすぐな道を歩く。”“彼はまっすぐに感ずる。”“まっすぐな言葉”

およそ――たとえ実際それが子どもにすぎなくても――こういう言葉を聞いて気持のよくない者があろうか。

しかし、“彼は、曲がった道を行く。”“そんなに曲がって、回り道をしてはいけない。”“私は、曲がったことが嫌いだ。”

こういうことを言われて、誰がその快活な気持を曇らせないでいようか。

であるから、早くから、まっすぐなものを曲がったものと区別することを覚えこむことが、あなたの愛する子どもにとって必要なのである。

このことは、またこの絵の下図を描いたときの画家の念頭にも浮かんでいたように思われる。――魚は、まっすぐに、また、曲がって泳いでいる。水は、まっすぐに、また、曲がって流れている。木は、まっすぐに、また、曲がって生えている。そしてまっすぐな、すらっとした花嫁草（カラー）の花には、不気味にくねりながら、蛇がのぼって行く。

あなたが早くから、あなたの幼児に、まっすぐなものと曲がったものの区別を永続的にし、感じるようにし、また行為と生活において、思索において、談話において、曲がったものの感情には不気味さを、まっすぐなものの感情には快さを、永続的にし、感じうるようにさせたとする。そうすれば、まっすぐなこと、および、それに伴って起るすべてのものが、彼の行為の表現になるであろう。そして、彼は、彼の活動の適当な場所において、彼のあらゆる方面に開発された力を正しく使用しながら、自由に、よろこばしく動くであろう。ちょうど、小さい魚が小川の中でたのしく動くように。

*1）原著では、この箇所での題は「小川の小魚」

*2）元訳では「生活欲」だが、原語がdie Lebenslustなので、訳語を「生活意欲」に変えた。

筆者による補足

まっすぐと曲がったこと

子どもが、自分から母親を離れて、兄や姉にくっついて外の世界へ出かけ始めると、フレーベルは子どもに教え、気づかせることとして、「まっすぐ」なことと「曲がった」ことの識別を挙げています。また、本来、あるべき姿にあるならば「まっすぐ」も「曲がる」も自由に心地よく行なわれて、それはまた見る者にとっても快い魅力的な姿であるということを主人公の子どもに意識化させています。また、曲がりくねって動く蛇に不気味さを、純白でまっすぐなカラーの花に快さを意識化させています。

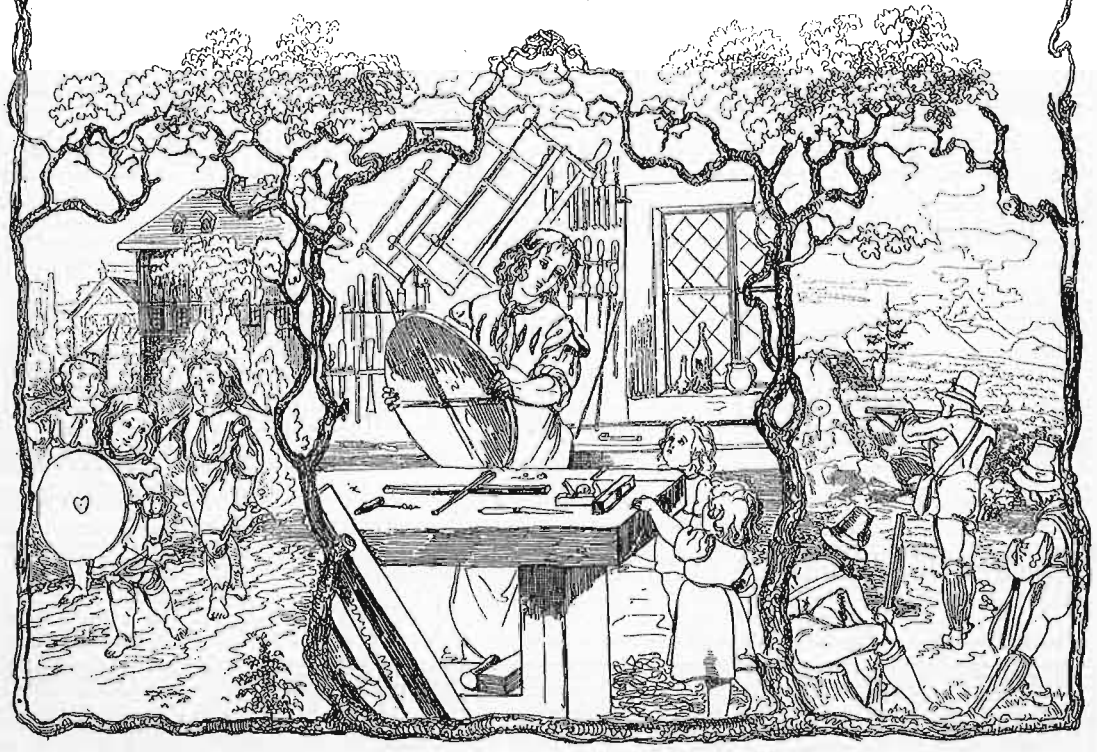
さらに形態として「まっすぐ」と「曲がった」とを識別させるだけではなく、同じ形態でも事物によって心情的な受け止めに違いが出る（蛇の「曲がる」は不気味、小魚の「曲がる」は魅惑的。小魚の「まっすぐ」は不自然で不安をおこさせる、カラーの花の「まっすぐ」はすっきりと心地よい等）ことにも気づかせています。

このような描写から、フレーベルの意図する幼児期の「識別」とは、単なる知的作業なのではなく心情と密接に結びついたものとしていることが明らかになります。それだけではなく、筆者は、例えば口に入れてもよいとか近づかない方がよいなど、実生活の必要とも密接に関わっていたのではないかと感じます。

Längweis-kreuzweis.

„Wie deutungslos dieß Spiel
So liegt darin doch viel,
Es gleicht dem rohen Stein,
Erscheint als Farben-Ein,
Wie auch Verschied'nes gern
Wie auch Getrenntes fern
Und noch viel And'res traun?
Für den, der liebt zu schaun
Die doch des Kindes Sinn
Und ihm zum Hochgewinn
Daß alle Thätigkeit
Und daß der Arbeit auch
Daß nichts willkührlich sei,
Daß Ebenmaaß hervor
Dieß mach' dem Kindchen schon,
Dieß ahnend, wird's das Maaß
Auch immer mög' erscheinen,
Mehr als man möge meinen.
Der, wenn er nun geschliffen,
Vom Aug' mit Lust ergriffen.
In Ein'gung sich wohl findet;
Zu Einem sich verbindet;
Läßt dieses Spiel erkunden
Wahrheit vom Spiel umwunden;
So wunderbar leis ahnet,
Den Weg zum Einsehn bahnet. —
Zu einem Ganzen führe,
Ein richt'ger Lohn gebühre;
Die Sachen sich bedingen,
Aus Allem gern will dringen:
Und im Gefühl, erfassen;
Im Leben auch nicht lassen."

Das Hölzchen leg' ich längeweis,
Das Stäbchen darauf kreuzeweis;
In beide bohr' ich ein Loch hinein,
Und schlag' einen hölzern Nagel drein;
Die Patschhand ist das Bretchen drauf:
Die Scheib' ist fertig zum Verkauf. —
„Wie theuer?"
Drei Dreier!
„Warum drei Dreier?" –
„'S ist gar zu theuer!"
Einen Dreier kosten die Hölzchen gerad,
Einen Dreier kostet das Bretchen glatt,
Einen Dreier beträgt der Arbeitslohn,
Wer das nicht zahlt, der geh davon?



11.

縦（たて）に横に

この遊戯は意義のないようでも、
その中には種々のものが横たわっている。
それは粗（あら）い石に等しい。
一つ色に見えても
異なったものも
遠く別れているものも
なお様々の他のものも入っている。
子どもの心でこれらを
見ることを愛する人には
高い利益となるのだ。
すべての働きは、
仕事の働きでも
何一つわがままなものは無く
均斉（きんせい）が出ていることを
もう子どもに知らすがよい。
これを予感すれば、尺度は、
譬（たと）えどのように見えても、
人が思う以上のものになる。
磨かれている者は
見る眼に喜ばれる。
種々のものが集まって
一つのものに結びつく、
その真理を纏（まと）いつけて
この遊戯で知らせよ。
不思議にもかすかに予感して
洞察への道が開ける。——
一つの全体に導け、
正しい報酬が与えられよ、
事物は相持（あいも）ちだ、
それが総てから選（ほとばし）るだろう。
そうして感情の中に把握されて
世の中へ出ても捨てられない。

木ぎれを私は縦に置き、
その上に棒を横におき、
二つ重ねて穴をあけ
木釘一本うちいれる。
ぴしゃりと板をその上へ、
的の売り物できました。
　“いくらです。”
　九銭
　“なぜなぜ九銭。”
　“それは全くたか過ぎる。”
三銭は木の代、
三銭はけずり板、
三銭は仕事代、
それが払えにゃ去（い）っとくれ

「欄外装飾画の説明」

縦に横に

私らはこの遊びによって、1つの新しい、全く独自な段階に歩み入るのである。けれども、この小さい遊びは、子どもの発達の順序において、1つの重要な地位を――それが、どのようなものであるとしても――占めなければならない。実際、私は、種々の地方において、また南北ドイツの多種多様な方言において、この遊びを、一般の原形にしたがって発見した。私にも、それは、子どもの全生涯にとって重要なように見える。それは、もっとも微(かす)かな足取りをもって、知識と実業の生活へ子どもを導き入れるのである。

母よ！　あなたはおそらくこの遊びの外面をすでによく知るであろう。あなたの幼児は、何らかの姿勢であなたの前に立ち、あるいは、腰かけて、時には、左手、時には右手を、あなたに向かって水平に差し出すのである。そこで、あなたは、上掲の歌を歌いながら、彼のもう一方の手の人差し指か、でなければ、あなた自身の人差し指を取り、それによって、最初の手の1つの上へ、直角に交差する2本の線を描く。それから、あなたは、中指でこの交差点へいわば穴を穿(うが)ち、それを槌(つち)として1本の釘を打ち込む真似をし、あなたの手を平たくその上に置くのである。

たしかに、ここに付加されている題詞は、すでにこの小さな遊びの内的な意味を暗示しようとしているが、しかし、どうか、つぎに私がいくつかの点においてこの意味をもっと明らかに暗示することを許していただきたい。先に述べたように、この遊びはもっとも雑多な形式において非常に一般化されているが、一体、それはなぜであろうか。本当のことを打ち明けて言えば、私はこの遊びの中に、子どもの注意を、位置と形式、ならびにそれと共に必然的に付随する諸現象へ、向けようとする最初の兆候を認めるのである。

一方の線は縦線、他方のは横線であり、両方が互いに結びつくと、1つは垂直に、他のものは水平に見えるようになる。それらは、互いにその半(なか)ばで、すなわち、中心のところで交差する。こういうふうにして、また相対のものがこれらを1つに結合させて、そこには四個の同じ直角が横たわる。これらの直角は、2つの線が互いに交差することによって形づくられるものである。しかし4つの端をもつ2つの線は、1つの平面に横たわっている。下になっているのと、上に重なっているのと、2つの手が二重にそれを示す。あなたは言うであろう、“しかし、それは私には1語も分からない。一体、どうしたら私の子どもにそれをいくらかでも理解させることができるだろう”と。

母よ！　あなたは正しい。私が今言ったことを仮にあなたの子どもに話してみても、彼はそのことについて1語をも理解し

ないだろう。しかし、母よ、彼はそのことがらについては何らかの予感をもつにちがいない。もし、そうでなければ、この遊びは彼を悦ばせはしないだろう。

したがって、思いやり深く心を配る母よ、あなたには分かったであろう。言葉の知識よりも、事物の知識の方があなたの愛児にとって、より分かりやすく、より深く、はるかに根源的・自然的・効果的*1)であるに相違ないということが。であるから、もしあなたが彼を自然的な効果のある*2)方法で教訓したいならば、直接に事物の観察と事物の経験によって教訓するがよい。あなたは、なぜこの教育方法がそのように永続的なのか、訊ねるかもしれない。

すなわち、自ら観察したものは深く刻みつけられ、3つのものが常にその中に結合されている。このことをすでにあなたの子どもはおぼろげに感じているように見える。第一には事物（個別のもの*3)）、第二には一般的なもの、第三にはこれら2つのものの子どもに対する関係。

ここでも3つのものは結びつけられている。

たとえ子どもがまだそれの名を言うことができなくても、それらは、彼の内に、たしかに力強い感じを目覚めさす。

もし、そうでなければ、彼はそんなに注意深くそれらを見つめないだろう。

それら3つのものは1つの目標へみちびく。

もう今でも子どもがよろこんで行きたがっているあの目標へ。

それは、事物を、大きさと数と形態にしたがって彼の力の自由に支配することにほかならない。

画家もこのことを幼児に分からせようとしているように見える。3人のチロルの狙撃兵が同じ1つの的を狙っている。そして、標的をもって向こうへ行く3人の子どもの心の中には、おなじ欲望が動いているのである。

*1）*2）
元訳は「痛切」および「痛切な」。原語はどちらもeindringlichであるので、ここでは「効果的」および「効果のある」に直した。

*3）元訳は「特殊なもの」。原語はdas Besonderであるので、ここでは「個別のもの」にした。

筆者による補足

1）この歌から保育の新段階へ
2）全体、一

1）この歌から保育の新段階へ

「欄外装飾画の説明」の冒頭に「この遊びとともに私たちはひとつの新しい、全く独自な段階に歩み入る。――それは、最もかすかな歩みで知識と実業の生活（Erkenntnis-und

Gewerbsleben）に導き入れる」と語られています。これまでの歌とは段階が変わる、つまり保育の質が変わるというわけです。第Ⅱ部第2章第3節および第6章に述べているので参照してほしいのですが、フレーベルが設けた子どもの精神的な成長のための新たな段階です。

この後に「段階」（die Stufe）に言及されるのは（42）「馬乗りとよい子」だけですので、子どもの「精神」の成長という観点からすれば、「遊戯の歌」50編には次のような3段階が設けられているということになります。

第一段階　（1）－（10）主題について第Ⅱ部第2章第3節参照。

第二段階　（11）－（41）「知識と実業（生業、職業労働）の生活」

第三段階　（42）－（50）「情操・性格・意志の形成」

このうち第二段階については、さらに、

（11）－（23）……これまでから連続する子どもの成長を辿る。幼児期の終わり頃まで。

（24）－（31）……光を主題にした歌のまとまり。

（32）－（41）……子どもが見ることのできる大人のさまざまな職業労働のまとまり。

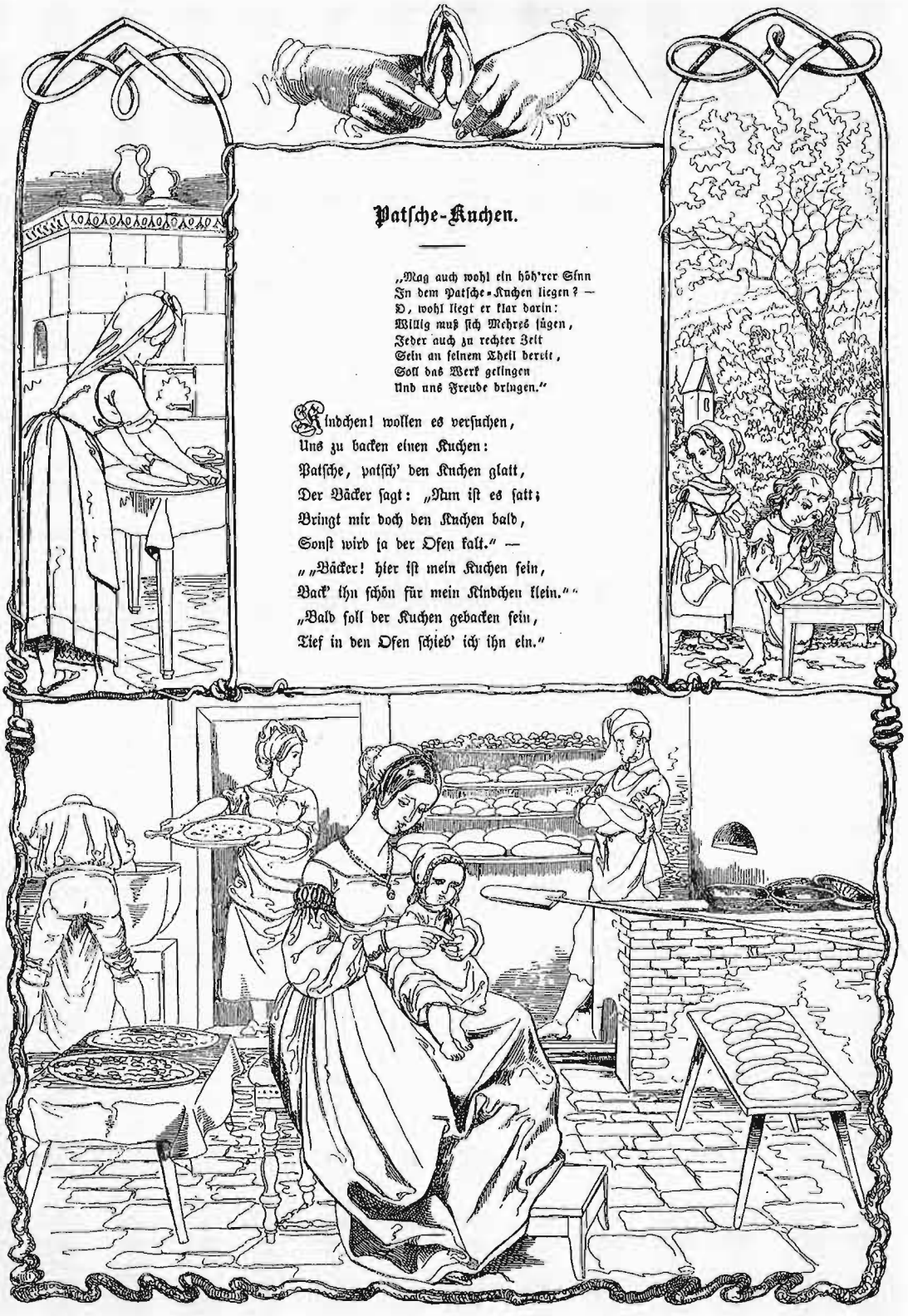
という、明確なまとまりが認められます。これらのまとまりについては、第Ⅱ部第6章のこれらの歌のところで再び説明を加えることにします。

2）全体、一

「全体」とか「一（いつ）」とかフレーベルがいうとき、それは彼の世界観そのものであって彼の教育を基礎づけている概念です。繰り返しますが、彼は世界をキリスト教における神が創造された世界と受けとめています。だから世界に存在する万物はただ存在しているのではなく、その全てが個々別々に異なるものであるけれども各々神の創られた世界の一部分として存在している。生命体や生命に似た作用をする個体はそれ自体で成長、発達等の変化をするけれどもそれぞれに個体として常に完全であるように、神に創られた世界の中の個々のものは変化し続けているけれども、全体になったときには常に神に創られた世界としての調和を保っている。そのような全体を彼は「全体」と表現しています。「一」という場合も、その中に多種多様かつ不断に変化するものを含みつつ全体として1つになった調和をもっているという意味合いをもって使っています。

そこから、人間（わたし）は1人の人という意味では常に完全な存在ですが、同時に、万物の中の一部分であって、他の存在（人、動物、植物、無機物、神）とつながりあって生きていることを信じられる世界観を形成していくことが人間の教育とされるわけです。

全体、一については、第Ⅱ部第6章第4節の本歌のところでも再びふれています。



Patsche-Kuchen.

„Mag auch wohl ein höh'rer Sinn
In dem Patsche-Kuchen liegen? —
O, wohl liegt er klar darin:
Willig muß sich Mehres fügen,
Jeder auch zu rechter Zeit
Sein an seinem Theil bereit,
Soll das Werk gelingen
Und uns Freude bringen."

Kindchen! wollen es versuchen,
Uns zu backen einen Kuchen:
Patsche, patsch' den Kuchen glatt,
Der Bäcker sagt: „Nun ist es satt;
Bringt mir doch den Kuchen bald,
Sonst wird ja der Ofen kalt." —
„„Bäcker! hier ist mein Kuchen fein,
Back' ihn schön für mein Kindchen klein.""
„Bald soll der Kuchen gebacken sein,
Tief in den Ofen schieb' ich ihn ein."

あとがき

今、フリードリッヒ・フレーベルの霊前と、これまでに出会ってきた幼子たちに、この研究を捧げる。

『母の歌と愛撫の歌』を取り上げたきっかけは、30年近く前、筆者が幼稚園教師として抱いた疑問にある。当時、筆者は新米幼稚園教師として子どもたちと過ごし、楽しくて無我夢中で日々の保育を作っていたが、慣れてくると、保育の豊かな積み重ねと味わいの中に何かしっかりした骨組みを感じ始めた。しかし、当時は、それが何なのか全く見当がつかなかったのだった。

教育課程という領域が疑問に応えられるのではないかというアドバイスを受け、再度の遅い学びを京都大学教育学部において始めたが、何をどのように調べれば保育の骨組みを掴めるのか、手探りをするものの全く見出せなかった。そして、考え抜いた時に閃いたのが、原点へ戻る、すなわち乳幼児教育の始祖であるフレーベルを見直してみることであった。

すぐにその足で教育学部図書室へ行ったとき、貴重本として保管されていた『母の歌と愛撫の歌』の初版本が、まるで手品のように目の前に置かれた時の茫然自失を今も忘れることはできない。当時、筆者はこの貴重な書が日本に、ましてこれほど身近にあるとは夢にも知らなかった。まるでフレーベルから直接に手渡されたかのような夢見心地から始まり、25年が過ぎた。今、現在の乳幼児保育実践の土台になっている最初の理論的枠組みとその内容をフレーベルから学び知ることができ、またそれを上梓できたことに安堵している。

本論が世界最初の試みとはいえ、本論によって分かっていただいたように、フレーベル乳幼児教育・保育の実践的内容は、教育方法学的観点からの検討によらなければ明らかになり得ない。その意味で、研究は口火を切ったばかりである。保育現場にみなぎるあの豊かな味わいがより明らかになり、より豊かになるために、今後、同じ観点からの研究が発展することを願っている。

本研究に茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』を入れるにあたり、版権期間を過ぎているとはいえ快く許可をいただいた岩波書店および新刊同様の貴重な同書を快く貸与して下さった藤田芙美子教授に心から感謝を申し上げる。1934年に刊行された同書は、わが国最初の本格的翻訳というだけではなく、折り蓋のケース箱に入ったＡ４判サイズの実に端正な美しい本である。刊行を企画したジャパン・キンダーガルテン・ユニオン、翻訳者の茅野蕭々とその門下生、絵の印刷のために当時わが国唯一の初版本を岩波書店に貸与した倉橋惣三、岩波書店、全員の思いが結集していると感じられる。今回、本研究を発刊する間際になって、私は初めて新刊当時のままの同書にふれる機会を得た。そして、フレーベルの思いだけではなく、乳幼児教育・保育に心を注ぎ込んだ日本の先人たちの思いをも知らされた気がしている。

社会人であった筆者は、偶然の機会から遅い学びを始めて幼稚園教諭へ導かれ、さらに乳幼児教育・保育学研究へ導かれたが、その間、神からの宿題としか思えない主題を次々に与えられて、それぞれの宿題を果すために必死になって過ごしてきた気がする。その成果として上梓したのが『聖書の子ども観』（青山社、2001）、『倉橋惣三の保育論』（現代図書、2003、改訂 2008）、そして本書である。

そして、そのように過ごしている内に、いつの間にか筆者自身が根本から変えられたことがある。それは、自分の抱いた疑問は誰か偉い先生が明らかにしてくれるものとそれまで思い込んでいた筆者が、いつしか、自分の抱いた疑問は誰にも肩代わりできず自分で明らかにしていくより他ない、という当たり前のことを当たり前とするようになったことである。研究を通して得た最も大事なこととして今いい得るのはこのことである。どうか、自分の抱いた疑問を大事にして自分で探ってみてほしい。そして、それは楽しいということを知ってほしい。

本書になるまでに北陸学院短期大学在勤時代、現任の聖母女学院短期大学、また㈳キリスト教保育を始めとする保育関係においてお世話になった皆様を始め、古くからの友人・知人、家族を含めて数え切れない方々の支えと励ましを頂戴してきたことに思いを馳せる。予想以上に長引いたため完成をご報告できない内に帰天された方々も多く、忸怩たる思いをも抱いている。しかし、仕事に忙殺されてきた歳月を顧みるとき、何度か健康を脅かされたにもかかわらずここまで守られて本書を提出できたことに心から感謝し、本書をもってお礼とご報告にかえさせていただきたい。

最後に、この本の上梓についてもお世話になった現代図書にお礼を申し上げる。特に井上節子さんにはさまざまにお世話になった。心から感謝したい。

今後、フレーベル乳幼児教育・保育の実践的研究がより発展し、子どもたち・保育者・家庭の生活が、より大らかに、楽しく、充実した日々になることを心から祈る。

2009 年 10 月 25 日

児玉　衣子

■著者紹介

児玉　衣子（こだま　きぬこ）

1943年　大阪府生まれ
聖和女子大学教育学部キリスト教教育学科卒業
聖和大学大学院教育学研究科幼児教育学専攻修士課程修了
京都大学教育学部教育学科卒業
同大学院教育学研究科教育学専攻修士課程修了
北陸学院短期大学教授を経て、現在、聖母女学院短期大学教授

著　書　『保育内容・計画総論』（共著）、樹村房、1996年（改訂版、2000年）
『聖書の子ども観』（単著）、青山社、2001年
『倉橋惣三の保育論』（単著）、現代図書、2003年（改訂版、2008年）
『子どもの教育と保育の原理』（共著）、建帛社、2005年
『キリスト教保育』（共著）、聖公会出版、2007年
『キリスト教保育の50の質問』（共著）、キリスト教保育連盟、2008年
『倉橋惣三文庫⑩倉橋惣三と現代保育』（共著）、フレーベル館、2008年他

フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究

―― フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討から ――

2009年11月30日　第1刷発行

著　者　児玉　衣子　©Kinuko Kodama, 2009
発行者　池上　淳
発行所　株式会社　**現代図書**
〒229-0013　神奈川県相模原市東大沼2-21-4
TEL　042-765-6462（代）　FAX　042-701-8612
振替口座　00200-4-5262　ISBN　978-4-434-13818-8
URL　http://www.gendaitosho.co.jp　E-mail　info@gendaitosho.co.jp

発売元　株式会社　**星雲社**
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
TEL　03-3947-1021（代）　FAX　03-3947-1617

印刷・製本　モリモト印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan 2009

ISBN978-4-434-13818-8
C3037 ¥9333E
定価(本体9333円+税)

9784434138188

1923037093335

発行所/現代図書　発売元/星雲社